

ひになりました事が一度ございました。普通の人の泣く時は、奥様は笑つておしまひになり、却つて伺ふ者が泣かされました。世に賢夫人と云はるゝ方につかへたお嫁様と、英雄の妻とは御苦勞が多からうと思はれまた何かよりどころがなくてはと思ひました。奥様は大そうな敬神家で居らつしやいました。「神のお涼しいお聲が云々」と云ふお話は、時々伺ひました。日露戦争中にも、南山や、二〇三高地の大激戦に、多数の兵士が死にましたから、内地にある父兄、或は將軍を恨み、新坂町のお邸で、色々悪口を申したり、石など投げたさうでございます。さすがの賢夫人も聞くに堪へないで、その夜下女一人をお連れ遊ばし、三等車で密かに山田に着かれ、夜の明けぬ内に齋戒沐浴して、大廟に御参拜遊ばし、我が國の勝利に歸する様にと御祈願をこめられました。いつしか夢現に入られ、暫くまどろんだと思はれると、何處からともなく、涼しい聲で「汝の望は叶へてやる。そのかはり、汝の二子は失ふぞよ」との神託があつてお覺めになりました。のお話でございます。其の後お二人様御戦死の報を聞かれて奥様は少しもお驚きなく「寺内様が、あの時私が平氣で、さうですかと申しましたら、あなたがさうあきらめて下さるので私は安心しました、と云はれました」と後に奥様のお話でございました。將軍は「二人ともよく死んでくれた。これで、夥多の兵士の父兄に面目が立つ」と申されたさうでございます。此の一事でも、夫人は一般の婦女子と異なり、淑徳の高い將軍と心情御一體であつたので、常々の御修養のほどが思はれます。

自刃前の將軍夫妻の印象

序を以て編者も亦將軍夫妻に最終の面會を遂げた當時の情況を記さして貰はう。

編者は乃木學習院長の希望により、海軍大臣の命を受け、且東郷元帥の意見を貰した上、明治四十五年二月より同院の御用掛を兼務することになった。すると翌四十五年の五月となるや、軍令部參謀から常磐艦長に轉補せられ北清に廻航したが、學習院御用掛は其のまゝで乗艦したのである。其のうち大正元年九月十三日の御大葬に際し、弔意を表する爲め横濱に來集すべき外國軍艦の接待を命ぜられ、同月七日同港に着いたので、翌八日、久々で乃木院長を赤坂新坂町の私邸に訪ふた。さうして院長並に夫人に面會した。すると院長はいと沈痛の語調で、先づ先帝御發病の御模様より、其の後の日々のお経過を沁々と謹話せられ、終に御登遐あらせられたることに及び「どう考へても崩御あそばされたやうには思はれぬ」と言ふて悄然と頭を低れた。

編者は院長が想像してゐた以上に憔悴れをらるゝに驚き、或は慰め或は勵まし、約三時間談話を交へて後辭去したので、これが編者との永遠の別れとなつたのである。然うして今から追憶して見ると、何うも院長の態度には平素と少し異つてゐた所があつたやうだ——勿論其の當時は然ることに氣づきはしなかつたのだが——先づいよ／＼辭去しようとして立上ると、院長も立つて編者の側に近づき、突然編者に握手して打振り、

『では又暫くお目に懸かれぬから、身體を大切にされて』

と囁くやうに小聲で言はれた。こんな態度は從來嘗て無かつた事で、編者が今少しく敏感であつたなら、變だと思ふ筈であつたのに、握手せられたのは久々の面會なるがゆゑだらうし、また暫く遇へぬと言はれたのは、外國貴賓の接待がよりとして御大葬直後西下せらるゝが爲めだらうと、無意識に意識してしまつた。それから辭去して門を出ようとしつゝ偶然ふり返へると、院長は尙ほ玄關に佇んで凝つと編者を見送つてをられた。斯様に院長には、後に考へると多少異なる點があつたやうだが、夫人は、最初編者が應接室には入つた時、隣室で夫君と共に頻りに書類を整理してをられたのを中止し、靜に編者に一別以來の挨拶をせられ、それより色々會話をされたが、その態度といひ音調といひ、平素と異なる點が無かつたと記憶する。尤もそれは編者に對する關係が夫君と異つてをつた爲めであらう。何にしても日本婦人の龜鑑である。

武士道より見て、敵將を惜む

ロジストウエンスキー提督は、左も右も非凡の人物である。あの如き大艦隊を率ゐ、一萬五千海里の長途を、はるく航破した伎倆と苦心とは察するに餘りある。唯彼が勇往邁進して、一日も速に目的地たるウラジホストツクに達せんと努めず、

途中にて孤疑逡巡の狀を示したのには同意を表し難い。あの際に於ける彼の艦隊の東洋到着が、一日早ければ一日の利があつたことは、觀易い道理で他に何等かの事情があつたにしても、それらに拘泥すべき場合では無かつたに、事爰に出でなかつた彼の心事は解するに困む。また彼我の道德は、其の根本に於て相違の點があるから、一概に彼に望むは或は無理かも知れぬが、此方をして彼に對する遠慮なき希望を述べしめるならば、日本海々戰の際猶ほ奮闘を續け、天晴な戰死をして貰ひたかつた。然うしたなら彼は實に世界武人の精華と賞められ、萬世不朽の名を遺し得たであらうに、なまじ存命して捕虜となつたのは、返すくも彼の爲めに惜むべき事であつた。

【註釋】 這是日露戰役凱旋直後、編者に向つて話されたものである。

由來相手の長所を認め、之を讚美すると同時に自己の覺悟に資する所あらしめんとするのが元帥の常習である。されば嘗て浪速艦長として從軍せる日清戰役に於て、敵の提督丁汝昌が、忠節を完うして威海衛に自殺したのを見るや、直に書を本國の友人に寄せ、其の中に『丁汝昌は感心に死申候』と述べてゐるのも、亦彼を讚

嘆したのに他ならないし、また日露戦役後の或る夜、自邸に於て親戚税所陸軍中將及び編者と會話の際、談端なくも露國の名將クロバトキンの批評に及んだ。すると元帥は、編者に向ひ、

『クロバトキンが戦況不成績のためとはいへ、滿洲軍總司令官より一軍の司令長に貶黜せられたに拘らず、平然として其の職に留まり、益々本分を盡したのは見上た精神ぢや』
と頻りに褒めそやしたので、税所中將は笑ひだし、

『それは閣下が彼を買被つて御座るので、當時もし彼が不平がましいことでも言はうものなら、どんな罰を喰うかも知れぬゆゑ、黙つてゐるのが上分別と、利害關係より打算し、唯々として居たと思はれますが如何なものでせう』

と抗辯したので、元帥も莞爾として、

『或はさうかも知れん。併し何も強ひて人の胸中を付度して悪い方へ解するに及ばないではないか。其の事が道に叶ふてゐるならば、成るべく善意に解し、さうして夫れを自己の訓戒に資すべしだ』

と答へられた程であるから、日本海々戦の當の相手たるロ提督に對し、男兒的同情を寄せられるのは然もあべきことで、佐世保病院に彼の負傷を見舞つた時の温情など何うであつたか。

『御気分は如何であるか深くお案じ申す。云ふまでもなく勝敗は兵家の常であつて、必ずしも恥づるに及ばぬ。要はその本分を盡したか否かにある。貴艦隊ははるく一萬五千海里を航破せられた、其の技倆のみでも、決して尋常一様の業ではないのに、二日に互れる激戦において、貴艦隊の將士が勇戦奮闘せられた有様

は、我々の感服する所である。當病院は、病院としての設備より無いので、定めて御不自由勝であらうが、何卒自愛せられて、一日も速に快癒せられんことを祈る』

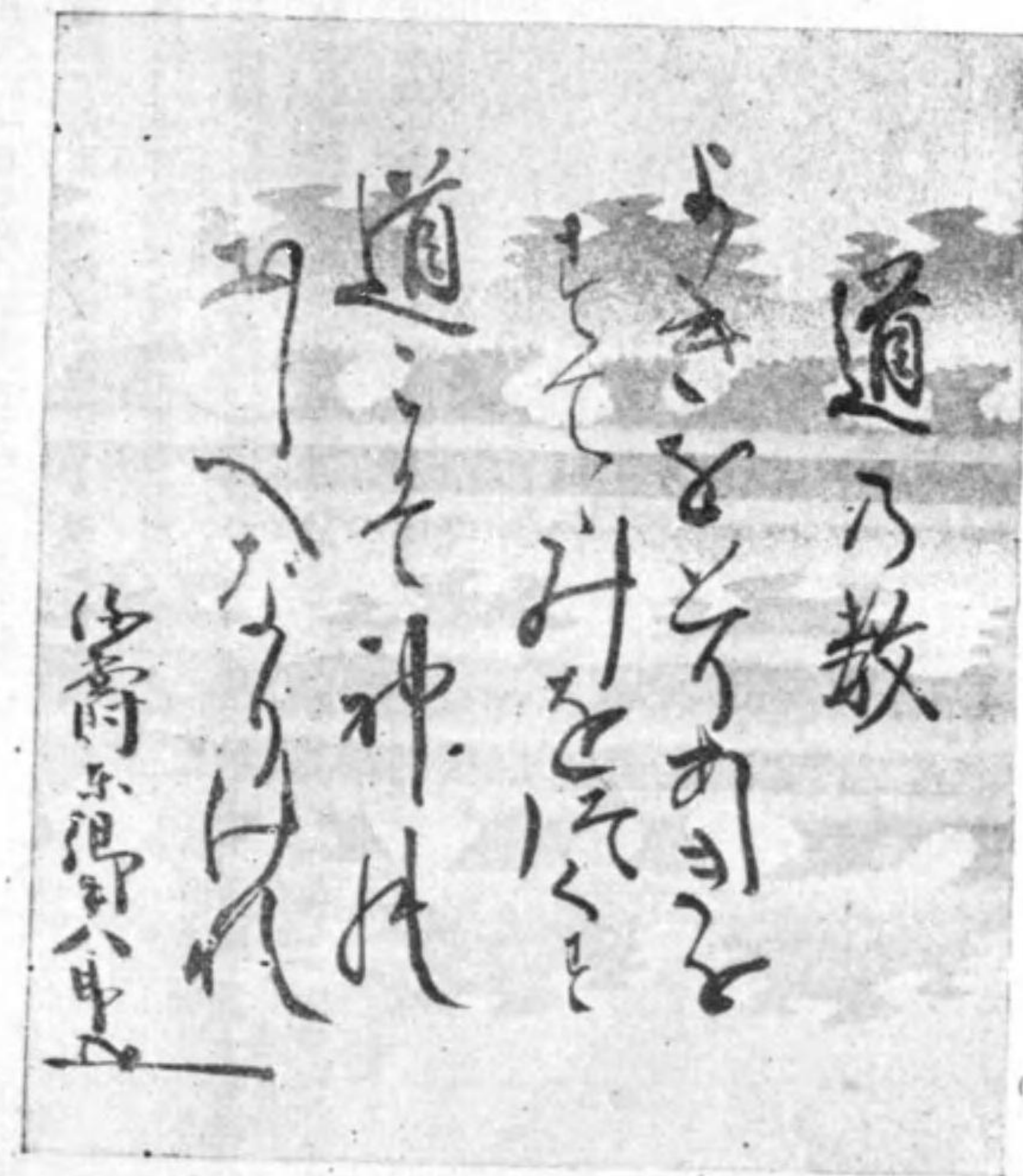
同情は言外に溢れてゐる。されば之に依りロ提督をして、

『貴官の御同情は、小官をして負傷の苦痛を忘れしめる』

と泣かしたては無いか。併し同情は同情として、日本武士道の見地よりする意見を擲つべきでないから

『天晴な戦死をして貰ひたかつた』と其の行動を惜まれてゐるのは、蓋しロ提督のために惜むとするよりか、我々後進者に對する武士道的訓戒と解すべきであらう。編者はさう考へてをる。

三笠物語



東郷元帥の筆蹟

軍艦三笠！ なんと云ふ懐かしい然して忘れがたい名であらう。

憶ひ起す日本海々戦の當時、彼が聯合艦隊の旗艦として先頭に立ち、四十餘箇の巨弾に貫かれながら奮戦復奮戦、遂に敵艦隊を全滅した其の報告が内地に達した時、我が國民は狂喜して手の舞ひ足の踏むところを知らず、咽喉も裂けよと聲の限り彼の功績を謳歌したのであつた。然るにても運命の神の惡戯は、嘗に人間の上のみにては無かりしよ、あはれ大正十年の華府會議の結果、無慘や彼は軍縮の犠牲に供せられ、爆沈か解體か、其の一を免かれざるの悲境に陥り、吾人をして、狡兎死して走狗烹らるの歎を禁ぜしめ得なかつた……が報恩の志深く同情の念篤き我が國民は付うして、之を默視して居よう、果然奮起せる有志者の熱誠に因り、『三笠保存會』は頃刻にして成つた。是に於て會員は部署を定め、或は當局に説き、或は外國使臣を訪ひ、東奔西走遂に輿論を喚起し各國の諒解をも得て、保存の目的を達することが出来たのである。

大正十四年六月二十六日財部海軍大臣は、『三笠保存會』の幹部を官舎に招待して、今後保存の方法等に就き懇談を重ねたので、之に關し一新聞紙は、興味ある左の報道を掲載した。

三笠保存——眞先きに

東郷元帥五十錢を寄附

ゆうべ六時半から財部海相官邸で開いた。三笠保存會幹部招待會に會長阪谷芳郎男が、

『三笠を横須賀白濱海岸に永久に保存する爲めには有志の鑿金を作りたが、少數の人から巨額の獻金を集め

たかない、十錢とか五十錢とか少額の金を全國より集めたい』と述べる。

列席の同會の名譽會長東郷元帥は男の趣旨に賛成して、逸早くポケットから五十錢銀貨を出すと小笠原長生子(著者曰くこれは財部海相の誤である)が東郷元帥の此の最初の五十錢を三笠と共に記念したいと云ふ所で晚餐會に入った。

斯うして、此の名譽ある老軍艦の保存は確實になつたのである。予は之れを機として、保存會員が何故如斯く熱心に其の保存を主張したかを説明しをくの必要を認め、其れが爲めには、同艦の經歷大要を示すに如くは無いと考へたので、借越ながら本文を起草することにしたのである。

北清の團匪の亂が起つて、東亞大陸が漸く多事になつて來た明治三十三年の十一月に、彼三笠は英國ヴィツカース社で進水せられ、同三十五年の三月完く工を竣へて、五月十八日に横須賀軍港に着したのである。

彼は其當時に於ける一等戦艦で、長さは四百呎、幅七十六呎二吋、吃水二十七呎二吋、排水量は一萬五千三百六十二噸、速力十八節五である。又搭載兵器の主なるものは、三十種砲四門、十五種砲十四門、八種十八門、機砲三門、水雷發射管四箇を有つて居るので、今日から見ると大したものではないが、其の當時にあつては、世界有數の堅艦で、洵に皇國海軍の一大勢力であつた。併し對露戰役に出征するまでの彼は、いまだ雲雨を得ない蛟龍が、池の中に潜んでゐるやうなものであつたが、其のうち彼に取つて一大記念たる明治三十六年十月二十八日

が來た。それは古今の名將東郷平八郎が艦隊司令長官に補せられ、此の日を以て始めて其の中將旗(東郷長官が大たのは明治三十七年六月六日である)を彼の大橋上に掲げたからである。

英國ネルソン提督の旗艦となつて、世界の歴史上に赫々の名を留めたヴィクトリー號の得意にも増して、一層偉大な坐乗者を得た彼三笠は、更に勇姿堂々として佐世保軍港に碇泊し、幾十隻の艦艦を従へて東洋の天地を睥睨しつゝ、爰に新玉の春を迎へた。

指折り數ふれば、我が政府が、滿韓に關し始めて露國と協議を開いた三十六年八月より、既に半歳を經過した。其間我は誠實一貫、忍耐を重ねて妥協に努めたのに、彼は一片の眞意も有たず、海に陸に軍隊勢力の増加のみを計つて、終には我が獨立をも危ふせんづ氣勢を示した。最早斯うなつては、外交を斷絶し、吾は我が信ずる正義に向つて邁進するより外に道は無いので、三十七年二月五日陸海軍に詔勅を賜ふて、獨立自衛の目的を達し帝國の光榮を全うすべきを命じ給ふた。

疾きこと風の如し、と孫子の言を借るまでも無い東郷長官は、詔勅を拜した其夜半を以て、直ちに作戰行動を開始し、翌六日の午前九時には、早く既に、

『豫定の序列に従ひ出港せよ』

との信號命令が三笠の橋上に飄つたのである。然して同艦は、艦隊の主力たる第一戦隊の眞先に立ち、軍艦マチの勇ましい奏樂を海上遙に響かせつゝ、敵の根據の旅順口へ眞一文字に進航したのは、何と云ふ敏捷さであらう。

火蓋は切られた！

猛烈な火蓋は切られた！

時は明治三十七年二月九日正午の頃、前夜我が驅逐隊の襲撃を受けて狼狽し、旅順港外雜然一團をなして居る敵艦の直前を、三笠先頭となつて十五隻縦陣となり、戦闘旗を潮風に靡かせつゝ、東より西に通過し、機熟せりと見る間も遅く、三笠は前部三十糎砲の試射をなした。之が旅順口に於ける第一の發砲で、續いて零時九分より右舷の全砲火を敵に浴せ、他の諸艦も之に倣つて、旅順口第一次の攻撃が行はれた。之れが彼三笠の初陣であつて、早くも數箇の巨弾を被むり檣上の戦闘旗を三度換へた程の手痛い働をなしたのである。

爾後同方面に於ける彼は、敵に呼吸をも呉れず目覺しい活躍を續け、前後八次の攻撃には、毎時先頭にあつて威力を恣にし、敵の頼みきつた名將マカロフの戦死、脱出せる敵艦隊の壓迫、さては三回の港口閉塞の援護など晝夜を分たぬ奮闘は、數へあぐるに違もない位であつた。

第一回第二回と、續けて閉塞に従事することを許された兵士は、全艦隊を通じて僅かに二人より無かつた。然して其の一人は實に三笠乗組の二等兵曹林紋平と云ふ者であつた。同兵曹は岐阜縣土岐村の産で、郷里には六十九歳になる老母と、脊髄炎に罹り半身不隨になつた益吉と云ふ弟があつたので、此の人々を養ふは、同兵曹より外には無かつたのである。併し彼には、君を思ひ國を思ふ至誠の血が燃たつて、身も家も顧みられず、指を切り鮮血を以て閉塞隊員に採用せらるゝの願書を認め、三笠艦長に提出した。其の熱心が徹つて、遂に拔擢せられたので、固より生還を期さない彼は、郷里の老母に次のやうな訣別の書を寄せた。

(前略) 若し戦となつた時は私の俸給全額を母上の許へ送るやうと、艦長海軍大佐伊地知彦次郎閣下まで願書を差出しておきましたゆゑ、母上の許へ私の俸給が皆行きますから其中十圓だけは貯金にして置いて下さい。其餘は僅ですがどうぞ小使にして下さい(中略) 新聞で見ると世界のものが皆海戦について注意してゐるさうで、一番初めの戦は海戦ゆゑ世界の人々が注目するのも無理はありません。こんな譯ですから海軍の兵士は命を捨て、働かねばなりませんので、もとより生きて還るといふやうな精神は無く國家のために死ぬる決心であります。どうぞ母上様には御達者で末永く御長命のほどを謹ながら祈つてゐます。

益吉様には御不運にて生れもつかぬ不具の御身となり残念のことと察しますが、どうぞ母様には心配をかけないやう御成長なされませ。

涙なしに誰が之を読み得るであらう！ 烈々火の如き忠義の裏に包む優しの心、母を懐ひ弟を慰む其の切々の情を偲ぶとき、三笠の艦靈も泣かすには居られなかつたらう。思へば斯くも健氣な勇士を出したのは、同艦の誇とするに足る所であつて、其の保存と共に、永久に傳ふべき語種であらねばならぬ。

「敵艦隊大擧出港せり」

明治三十七年八月十日の早朝三笠以下の主力艦隊を率ゐて圓島(旅順港の東方四十四哩にある小島)附近にゐた東郷司令長官は、敵監視の任に當つてゐる諸艦より前記の警報を受けとつた。

是より先六月二十三日、旅順港内の敵艦隊は、大擧して港外に出動し、我が封鎖線を突破せんとしたが、我が

艦隊に制壓せられて空く港内に引還し、爾後も絶えず其目的遂行の機会を覗つて居た。所が彼の戦勢は段々不利となり、殊に八月七日より開始せられた我が陸軍の、背面攻撃に耐りかねて居る折も折、露帝よりは是非とも脱出せよとの命令もあつたので、ウキトゲフト司令長官も遂に意を決し、全力を擧げて港を出で、屑く我と雄雄を争はんとするに至つたのである。

八月十日未明の頃より、旅順港内に黒煙漲り立ち、事ありけに見られたが、程なく大軍艦旗を翻へした九隻の巨艦、一齊に錨を抜いて須臾に長蛇の陣を制り、輕艦一隻、驅逐艦八隻を左側に引連れ、病院船を隊後に従へつゝ、堂々として港外に現はれると同時に、ウキトゲフト長官は、

『皇帝陛下は我が艦隊に浦羅斯德に赴くべきを命じ給へり』

との命令を發し、各艦船相衝んで沖の方へと急航した。驚破や敵艦脱出よと港外の遠近に見張をなしてゐた我が艦隊は東郷長官に其の趣を發信したので、同長官は三笠以下の諸艦を率ゐる旅順港外に急進し午後零時三十分に至つて、始めて敵艦隊の南東に航進しつゝあるを發見し、爰に黄海々戦の幕は切つて落されたのである。

黄海々戦は、日本海々戦と共に對露戦役に於ける二大海戦であると同時に、三笠に取つて二大功績の一で、其の惡戦苦闘の状は、寧ろ日本海々戦よりも甚しいものがあつた。此の海戦の戰場區域は東西七十浬、南北二十浬を算し、第一第二の二合戦に大別せられて七時間に互つてをる。然して云ふまでも無く、三笠は全艦隊の指揮艦として終始活躍したのであるから、敵の第一に目指たのも同艦たること勿論で、加之第一合戦の際は、彼我並航して敵は我より稍前方にあつたので、三笠は敵陣列の中央と相對することになつた。這は我に取つて甚だ不利な

形勢で、一時三笠は敵の全砲火を浴び、三十種の一敵弾は、風箏を起して飛び來り、同艦の後部に命中し、大櫓を貫いて爆烈し、大損害を被らしたが、我は更に屈せず益々奮闘したので、彼遂に敵し得ず、針路を轉じて逃げ出した。斯くと見たる東郷長官何條其のまゝ進すべき、三笠以下汽罐も裂けよと速力を増して後を追ふこと二時間及び、やうやく七千米突に接近したので、爰に第二合戦が開かれた。

此の合戦で三笠以下第一戦隊は、敵の先頭を壓して猛射を加へ、激戦一時間に及んだので、然しも頑強に抵抗してゐた彼も、復又敵し得ずして稍敗色立つたる折しも、三笠の發した巨弾飛んで敵陣の眞先にあつた旗艦ツエザレウキチの司令塔附近に爆裂し、ウキトゲフト司令長官を斃し、幕僚の全員、或は死し或は傷つき、艦長も亦負傷したのみならず舵機が破損して用を爲さなくなつたので、艦隊は自然に旋轉して自己の列中に突入した。之が爲めに其の陣列は潰え初めて、或艦は右し、或艦は左するの有様となつたから、我が第一戦隊は得たりと許り之に乗じて、卍巴と彼の周圍を旋りつゝ、愈々猛撃を逞うしたので、敵は遂に總崩となつて復戦ふべくも無かつた。仍で先任司令官ウフトムスキー少將は、脱出の望を抛ち、旅順港に逃げ歸る事に決心した。

『本艦に續け』

と命令して艦首を北に振向けた。が混亂した各艦は、散々になつて思ひ／＼の運動を取り、其の中の一隻は撃沈せられ、一隻は捕獲せられ、七隻は中立港に抑留せられ、其の他は辛うじて旅順口に遁れ入つた。爾來再び活動し得ざる程の大打撃を被つたのである。

敵に斯くまでの傷手を負はせたのであるから、味方にも相當の損害があつた。就中三笠は東郷司令長官の旗艦

であるが爲め、最も敵の狙ふ所となつて、要部に受けた巨弾のみでも二十餘箇に及び戦死三十二名、負傷は艦長以下九十三名を出した。然して其の人々は、何れも悲壯な物語を留めて居るので、今其の中から、特に著しいものを選び、以下順を追ふて列記して見やう。

金枝玉葉の御身を以て、平時と雖も辛勞多き海軍に御従事遊ばされ、今や三笠分隊長として出征あらせられた海軍少佐博恭王殿下は、黄海々戦には後部砲塔を掌らせられ、親しく三十種砲二門を指揮遊ばされて居た。所が第二合戦の當初、敵彈其の附近に爆裂し、殿下を初め十數名の砲員悉く負傷した。斯くと見たる卒二名は殿下を負ひ參らせて治療所に御伴れ申上げたので、軍醫が直ちに拜診しようとする、殿下は、

『他の重傷者を先にせよ』

と仰せられて容易にお許可が無かつた。軍醫は感涙に咽んだが、扱あるべきでないから、強て拜診すると、御軍服襯衣は皆破れて鮮血に染まり居り、右第三第四肋骨の部紫藍色に變じて、御疼痛甚しかつたので、夫れく御手當の上負傷者收容所に移し參らせたが、殿下は絶えず侍者に戦況やら部下の安否やらを訊ねさせられたので其の御勇氣と御慈愛とには感激せぬものは無かつたのである。

殿下御負傷の報告に接した伊地知艦長は、心痛限りなく、御容體を拜したさは山々であつたが、激戦中で艦橋を去り能はないで居ると、御附武官が、

『殿下は大丈夫であらせられる。御負傷は御輕微』

と叫んだので始めて安堵し、砲戦止んで後御見舞申上げやうとしたが、其の時には既に自分も右脚に負傷して歩行することが出来なかつたので、兵士に負はれつゝ御前に伺候したのは、如何にも悲壯の状況であつたと云ふ。黄海々戦の際、午後一時三十六分、敵の巨彈三笠の後部に爆裂し下士卒六名を殞し、分隊長市川大尉以下四名を傷けた。仍で其の隊の畑少尉が、分隊長に代つて砲臺の指揮を取つて居ると、又一彈が飛來つて同少尉を殞したので、更に澤本少尉候補生が之に代らんとする際、復又一彈が足下に爆發して身體を微塵に碎き、其の附近の小砲二門の砲員も、悉く戦死若くは負傷して一人をも留めざるに至つた。此の時非戦闘に居た池田、渡邊と云ふ二人の水兵咄嗟に駆けつけ、彈雨の裏に靜に破損砲に應急修理を施し、二人で必死の力を盡して發砲を繼續し、砲力を滅殺せしめぬことを得たのである。

東郷司令長官の從僕に、種渡定俊と云ふ青年があつた。心正しく優しい氣質で、平素から忠實に長官に仕へて居つたが、黄海々戦の際彼は豫ての配置に依り、負傷者の運搬に従事しながらも、少しの暇でも見出すと、砲煙彈雨の下を潜つては、煙草、平野水、ミルクなどを前艦橋に持つていつて、司令長官は申すに及ばず、幕僚、艦長達をも慰めて居つた。其のうち午後六時の頃、三十種の敵彈前艦橋に爆裂して將卒五名を殞し、艦長及び幕僚等六名並に下士卒十名を傷つけた。斯くと見た種渡從僕は、長官の身の上が案じられて耐らず、取つ措いつ千々に心を碎いてゐる折しも其の身も亦敵彈の爲め脚部に重傷を負ふて、治療所に運ばれることゝなつた。併し長官を思ふ一念は益々堅く、終には自身の分限をも打忘れ、痛手を忍びつゝ、參謀長の從僕を呼び、司令長官が司令塔内に入らるゝやう、副官に懇願し呉れと眞心罩めて頼んだもので、參謀長從僕は承知して、直ぐに永田副官の

許に驅つけ、恐るゝ種渡の切願を述べた。副官も其の心根には同情したものゝ採用すべき筋のもので無いから懇に彼の分限を説き聽かせて其の請を却けた。が深く友人の誠心に共鳴して居た參謀長從僕は、其の願意を繰返して止まないのので、有難の副官も無下に叱りかね、終に自身治療所に往いて種渡を諭した。すると此の忠實なる青年從僕は、傷ついた身を起して副官を蹴上げ、

『露出は危ない！司令塔にお入りになるやうお勧め下さい』

聲もきれ／＼に、願ひては泣き泣いては願ふ、其の切情のあまりに憐しく、副官も胸迫るまでに心を動かされ

て、

『可し閣下に申上げて見るから安心せよ』

言ひ了るや否や、艦橋に走り歸つて、一伍一什を東郷長官に告げた。折しも戦闘は酣で、東郷長官は爛々たる眼光に戦勢を督して居たが、青年從僕の熱誠を聴くと、優しい微笑を口許に浮べて軽く打頷き、

『負傷したか可哀さうに……いまに司令塔に入ると言ふてやれ』

其聲には三軍を叱咤する響は失せて、慈愛の音が充滿て居た。副官は再び馳せて之を種渡に傳へた。其れと聽いた彼は、始めて安心の色を浮べて治療を受けたのである。

『從僕の熱誠司令長官を動かす』

軍中語り傳へて美談となした。

敘上の如く黄海々戦は日本海々戦に次ぐの激戦であつたので、三笠は前述の通り二十餘の巨弾を被つた爲め、艦體の主なる破損のみにも九十五箇所の多きに及び、就中東郷司令長官が戦を督して居た前艦橋の如きは、次のやうな損害を受けた。之に徴するも其の如何に苦戦なりしかを察するに足るであらう。

- 一、破 損 箇 所 四箇所
- 一、肩橋釣床内に止まりし弾片 五箇
- 一、肩橋釣床を貫通せる弾片 三十一箇

黄海々戦は旅順の露國艦隊が最後の活動であつて、若し我が封鎖線を突破して、縦し其の半数にても浦鹽斯徳に逃れ得たならば大に形勢を挽回することも出来たであらう。が我が艦隊の猛烈な遮斷攻撃に遭ふて全然失敗に歸し、其大部分は遺々の體で旅順港内に遁け歸つたが、將士の意氣消沈して復出動するの勇なく、空く悲觀の日を送つてゐるうち、十二月六日に至り、港内の死命を制せらるべき爾靈山が、我が陸軍の手に落ちてからは、露國艦隊の運命は、急轉直下の勢を以て其の最期を實現し來り、朝に一艦を失ひ、夕に一艇を亡くし、僅にセワストーポリの一隻のみ、九日の曉天港外に出で、城頭山下の南方に避泊した。が其れすら三笠以下の艦載水雷艇や水雷艇隊より、連夜の襲撃を被つて艦底を破られ、十六日遂に海底に膠坐して仕舞ひ今や事實上旅順の露國艦隊は全滅したので、東郷司令長官は大本營の命令に基づき、二十五日旗艦三笠に座乗の儘、裏長山列島の前進根據地を發して吳軍港に歸着し、陸路東上して同三十日入京登營し、三笠は吳に於て意義深い歳を送つたのである。

彼が使命の前半を了つた三笠は、明治三十八年の一月七日吳軍港に於て再び舊知の名將軍を其の將官室に迎へ

光輝ある大將旗は復又其の大橋上に翻ることになった。然して同月二十一日東郷司令長官は同艦にて韓國南岸鎮海灣に至つて總艦隊を統督し、兵員の訓練勇ましいとも劇しいとも、形容に詞無い程の緊張さであつた。それも其の管、露の本國を發して現に東行の途中に在る新來の敵艦隊を邀へ、誓つて之を全滅せしめんとは、東郷司令長官が、大元帥陛下の御前に於て奏上した所で、之を實現せざる可からざるの大責任を有して居つたからである。其の爲めには天地を貫く至誠の精神と、百發百中の熟練とが、彼の唯一の戰策で、之に依らば全勝疑ひなしとの大自覺は金剛よりも堅く、人事を盡して天命を俟つと云ふやうな生澁いものでは無かつた。

我が聯合艦隊は、敵の來らざるを待むこと無く、我が常に待つあるを待みて銳意戰鬪力を蓄養したれば今再び新來の敵を撃滅せんとするに當り、本職は茲に何事の言ふべきなしと雖も、猶ほ此の最終の一戰に際し、寸毫の違算なからんことを期し、左に二三の訓示を與ふるものなり。(中略)

已に合戰するに當りては、又防禦を言ふの要無し。積極の攻撃は最良の防禦なり。假令非裝甲艦と雖も、我が猛火を以て敵の砲火を撃壓すれば、是れ取りも直さず最良の裝甲を有するに等し。我が砲數少き場合に於ても其の照準發射迅速確實なるときは、恰も我が砲數を倍加せるが如し。黃海々戰に見るに、我の三發する間に彼一發するの比例なりし、故に我が一門は能く彼の三門と對抗するを得べし。況んや我が射撃の練度は遙に優るあるに於てをや。(下略)

右は日本海々戰前に、戰鬪實施の覺悟に付き、麾下一般に與へた訓示の一節であるが、之に徴するも其の抱負と自信とが如何に篤かりしかを推知するに足るのである。

三笠は僚艦と共に、日本海々戰に至るまで五箇月の長い間、鎮海灣を根據として朝鮮海峽を扼して居つたので、許多の智將勇傑が、幾度か其の將官室に會して軍議を凝らし戰策を論じ、彼の音に名高き大將得意の「丁字」「乙字」の戦法も七段備の攻撃法も、皆此處で研究せられたのである。

世界の史上に特筆せらるべき明治三十八年(西曆千九百零五年)五月二十七日は來た。

是より先き我が艦隊では敵は五月下旬を以て朝鮮海峽に到達するであらうと推測して居つたので、水も漏さぬ嚴重な配備をなし、二十七日には第三、第四、第五、第六戰隊は、或は對馬に據り、或は五島方面を遊弋し、第六戰隊の一部及び假裝巡洋艦數隻は、海峽の西口に排列して、哨戒に従事し、又艦隊の主力たる第一、第二戰隊は、朝鮮南東岸なる加徳水道に泊し、獨り三笠のみは、大本營との通信連絡上同水道を進入して鎮海灣に投錨して居た。すると同日午前五時五分哨艦より、

『敵艦隊出現』

との電報があつた。副官より此の報告を受けた東郷司令長官は、冷靜の中にも喜悅の色動き、直ちに三笠艦長に出港を傳ふると同時に諸方面にある全艦隊に總艦隊に總艦隊を命令した。

『敵艦見ゆとの警報に接し、聯合艦隊は直ちに出勤之を撃滅せんとす。本日天候晴明なれども浪高し』

これぞ鎮海灣出發に際し、東郷司令長官が大本營に打つた日本海々戰第一の報告で、端的に敵を撃滅せんとする全勝の自信を述べた稀代の名文である。

哨艦よりの報告は續々と到達し、敵隊の艦數、陣形、針路等掌を指すやうに知られて來たので、午前六時五分に三笠は錨を揚げて加徳水道に出で、第一、第二戦隊の先頭に立ち、四驅逐隊、三水雷艇隊合して四十餘隻の艦艇を引率し、威風堂々として先づ沖の島の北方指して進航した。

沖の島の北方に達した我が主力艦隊は午後一時三十九分南西に方つて敵の大艦隊を發見した。彼は鼻風を吹き立つる老猪の如く、其の周圍に獵犬の役目をなして接觸を保ち居る我が第三、第五、第六戦隊等には目も呉れず一意専念北東を望んで急航した。

三笠の前部艦橋には、雄威神將の如き東郷司令長官が、嘗て東宮殿下より賜りたる一文字吉房の名刀を帶し、双眼鏡を取つて遙に敵を望んで居ると、幾もなく敵は三笠を距る七哩程に近づいた。其の陣形は最先に主力艦より成る二隊を二列に置き、更に他の一隊を後方に配し、二三等巡洋艦、特務艦等之に續き、連綿數裡に亘つて三十八隻の大艦隊は、世界征服を象徴せる青線交叉の軍艦旗を掲げ、祖國の悲運を此一戦に挽回せんとの意氣を示して進み來た。時正に一時五十五分。三笠の橋上には一連の彩旗潮風に翻つて千載不朽の信號は現れた。曰く、

『皇國の興廢此の一戦に在り、各員一層奮勵努力せよ』

全艦隊の將士此の信號を仰ぎ、感極まつて肅然一語なく、中には司令長官の胸中を付度して落涙したものとさへあつた。道理よ！

大元帥陛下の御前に誓ひ奉つた所を遂行して宸襟を安じ奉るも、國民が十年臥薪嘗膽の結果を實現するも、全艦隊の將卒をして天晴皇國軍人たるの本分を發揮せしむるも、盡く東郷其の人の双肩に懸かる。萬々一にも全勝

し得ざりし場合は如何に！

嗚呼『皇國の興廢此の一戦にあり』と、參謀をして信號旗を繰らしめたる其の利那の覺悟は人間の所有る雜念を超越して東郷もなく肉體もなく、唯其所に忠誠の結晶あるのみだ。洵に此を思ひ彼を憶ふ時、誰か、一掬感激の涙を惜まうや。

『天佑は誠意の反應なり、天佑なきは誠意足らざるが爲めのみ』

是れ長官が信念の基礎であつて、又正しく之を實證したのである。

三笠の艦靈果して如何なる感想を以て此の信號を掲げたであらう。

『閣下！ 何卒司令塔内にお這入下さい』

秋山參謀は、從來の戦況に徴し長官の身を氣遣ふて斯く勸めた。

『否此處で可い』

長官は背か無かつた。永田副官も勸めた。加藤參謀長も勸めた。併し長官は斷乎として其の請を却け、靜に幕僚を見返りつゝ、

『東郷は老人じや。貴方がたこそ御奉公の前途が長い。お這入なさい』

幕僚は長官を思ひ、長官は幕僚を思ひ、敵を前にして互に他を氣遣ふ優しの精神、神も照覽ありてか奇蹟を示し後激戦となるや敵の一彈司令塔の僅の間隙より塔内に飛込んで爆裂したのであつた。若し長官が中に居つたな

らと考へると今でも慄然とする。

總て彼我の主力艦隊は、孰れも縦陣を以て相對する形勢となつた。然れば其儘進めば、互に反對に通過し去つて利害共に相均しく、五分五分の勝敗に了らねばならぬ。併し戦闘は最初の二合が大切で、全般の成否も主として之に關するのであるから、這麼平凡な手段では全勝を得ることは思ひも寄らぬ。況して是が非でも敵を殲滅せしめねばならぬ東郷長官が仕うして之に満足しやう。平素に似氣なく緊張の色を漲らした長官は、頭を回らして屹度加藤參謀長を見、右手を舉げて左方に一振した。途端に參謀長も亦長官を見兩者の視線期せずして相合し心は心に默示せられた。

「長官！ 取舵にしませうか」

「可矣行れ」

「取舵一杯」

兩雄相顧て微笑を漏した。

三笠は今や大速力にも波上に大圈を描きつゝ、敵の前途を遮るべく左方に艦首を振向けた。此の時敵は我を距る八千米突の所にあつたが、我が針路を變ずるを見て、得たりと許り猛烈なる砲火を三笠に加へたので巨彈は敵の如く同艦を掠めて縦横に飛んだ。逸りに逸る將卒は、應戦せんと交々長官を仰ぎ瞻たが、長官は靜寂嚴の如く斷乎として發砲を許さない。敵彈は愈々繁く、死傷者は漸く殖えたが、長官は依然として應戦させない。其のうち一艦又一艦針路を變じ了つて、今や長官が得意とする「丁字戦法」は敵に對して漸次に敷かれ、戦機正に熟す

るや、長官の眼光一閃すると同時に、信號兵は喇叭も裂けよと「打方始め」を吹奏し、忽にして我が全線の砲火は敵の兩先頭艦に集中した。時正に午後二時十分。

戦闘は一秒一秒猛烈の度を高めて天を震はし地を動かした。さしも堅剛を誇つた彼の兩旗艦スワロフ及びオスラビヤも、何時まで我が忠士の筒先に敵し得べき、開戦後三十分にて早く既に敗色を顯し、漸時右方に回轉して我が鋭鋒を避けんとした。されど戦機を觀ること神の如き東郷長官が、何條之を見通すべき、第一、第二の兩戦隊颯と左右に別れ、之れ又得意の「乙字戦法」に變じて、呼吸をも呉れず攻めつけた。

日本海々戦は、日露兩國に徹底的勝敗の審判を與へたものである。然れば東郷司令長官が之に對する用意は有形無形共に周到を極めたもので、朝鮮海峡より浦鹽斯德港前に至るまで、四日に亘り七段備の攻撃法を立て、飽まで彼を全滅せしめねば止まぬ決心をなして居た。尤も實戦に當つては、時間及び敵發見位置等の關係から、第一第二段は取止めて、戦闘は第三段たる沖の島附近の畫戰より始まり、第四段たる同夜戦を経て、翌日第五段たる鬱陵島附近の交戦で、殲滅の目的を達し得たから、第六第七段は實行に及ばなかつた。併し之だけでも其戰場區域は頗る廣く、東西約百八十哩、南北二百哩に亘つて戦はれたのである。然して諸方面の合戦孰れも我は機先を制して彼は毎に受身となり、遂に殲滅の憂き目を見たのであるが、終始斯く爲し得た其の大原因は主として最初に敵前針路變換の果斷に出でた賜と云はねばならぬ。

我が鋭鋒を避けんとして右方に回轉した敵の主力は、惡戦苦闘を續けつゝも、或は右し或は左して北方への通路を求めたが、毎時我が主力艦隊に前路を遮られて猛撃を受けるので、各艦殆ど大損害を被り、加之火災に罹ら

ぬは無かつた。就中二列縦陣の先頭に立つたスワロフ及びオスラビヤは損害最も甚しく、オスラビヤは砲塔破れ大樑折れ、煙突は古紙を裂いたやうになり、水線部の弾孔よりは浸水激流の如く艦内に注ぎ、處々に大火災起つて死屍累々、惨状目も當てられない有様であるし、スワロフの損害亦之に劣らず艦内全く火焰に包まれ、加之巨弾司令塔に命中して塔内にあつたロジエストヴエンスキー司令長官の頭部を傷つけ、舵機をも破壊したので、艦は自然に回頭して列外に逸し去りオスラビヤも之と前後して戦列を脱したので、餘艦は頭を失つた蛇の如く、無秩序の一團となつて南方に遁れんとしたが我が第三戦隊等よりも側面攻撃を受け、其の艦隊の中堅となつて居る新式戦艦五隻中の四隻（スワロフ、オスラビヤ、アレ）及び假裝巡洋艦一隻特務船一隻は撃沈せられ、病院船二隻は拿捕せられ、ロジエストヴエンスキー司令長官は辛うじて驅逐艦に移つたが、後捕虜となつたのである。

日本海々戦は二日と一夜に亙つて居るが、勝敗の大極は二十七日で既に定まつたので、此の日の戦闘は、午後二時十分より同七時二十八分に及び合しては離れ離れては合し、前後三回の激戦を交へ、縦横に敵を驅け悩まして、日没より戦闘を驅逐隊艦隊に譲つたのである。

前述の如く、敵方では殆ど健全なもの一隻も無いと云ふ程の大打撃を被つたのであるが、彼も祖國の運命此の一戦にありとの覺悟を以て惡戦したのであるから、我が主力艦は孰れも多少の損害を受け、特に三笠は最も敵の狙ふ所となつたので、右舷側に四十箇左舷側に八箇の彈痕を印し、將士百十三名は或は殞れ或は傷つき兵器の損害も甚大で、前後の砲塔及び十四門の十五糧砲中、完全に残つたものは十五糧砲四門のみであつた。

三笠の被彈中第十六回目の命中彈は、右舷兵員圃の外板を貫いて爆發し、無數の彈片は東郷司令長官以下の居たる前艦橋附近に霰の如く迸り、清河參謀以下十五名を傷け、一破片は司令塔内にも入りて内にありたる四名をも傷つけた。のみならず他所にありたる松村副官以下も此の一彈の爲負傷し、又同じ彈の一大破片は、東郷司令長官の足下の甲板を斜に下より上に貫いたので幕僚は慄然として思はず色を失ふた。然るに其の破片は、長官の側に羅針臺の防禦として並べ立てられてあつた釣床の一箇を、七分通り貫いて床中に留まり、餘勢で其の釣床が長官の脚部に倒れかゝつた折しも戦闘は酣の際で、長官は雙眼鏡にて敵の運動を監視して居つたが、釣床が倒れかゝると、悠々之を跨いだのみで一瞥をも呉れず、依然として監視を續けたので、幕僚達はほつと安堵の胸を撫で下すと共に、あまりの豪膽さに呆れ返り「東郷さんは身體中から悉く神経を抜き取つたやうな人だ」と語り合つたと云ふ事である。

同じく第十九回目の命中彈の爲め、十五糧五番砲の砲員は全部死傷し、砲員の一人であつた野村二等水兵も、亦重傷を負ふて一旦其の場に倒れたが、自分以外に發砲するものが無いのを覺つたので、奮然身を起し、苦痛を忍び全身の力を集めて三回まで發砲したが、連も一人では續かないので誰れか加勢するものは無いかと索めて居た。すると恰度十五糧三番砲員の島四等水兵が其の側を通過しやうとした。此の三番砲も又敵彈の爲め砲員全部死傷し、島水兵も負傷したが輕かつたので、重傷の同僚を治療所に運び今しも舊の場所に戻らうとする所であつたのだ。斯くと見た野村水兵は、直ちに之を呼び止めて助力を頼んだので、島水兵も自分受持の砲は既に使用に耐へないやうになつたのを知つて居たので、獨斷で五番砲員となり負傷者兩人で發砲を繼續し、以て其の砲力を

減じなかつた。

同じく三十六回目の命中弾は、大橋の上部を切断したので、橋頂に掲げられてあつた戦闘旗と、東郷長官の大將旗とは共に海面に墜落した。言ふまでも無く斯かる場合に斯かる事のあるのは、指導の目標を失ふのみならず非常に士氣にも關係するのであるから、幕僚も艦長も思はず「嗟哉」と叫聲を擧げる程であつた。すると、前橋上に在つて見張の役を仕て居つた柏森信號兵曹——此の人は平素から職務忠實を以て知られて居た——は激戦となつた時には従來の經驗に徴して、或は敵弾の爲め大將旗戦闘旗等の墜落するやうな事があるかも知れぬと氣附いたもので、二族共に豫備品を携帯して居つた。其所で墜落と見るや、直ちに先づ大將旗を前橋頭に掲げ、再び赫々の光輝を放たしめた。之を仰ぎ見た將士は、

『職に忠なるの結果自ら用意の周到を促した』
と云ふて感歎を禁じ得なかつた。

又之と同時に、大橋附近の砲員であつた上森一等水兵は、軍艦旗の墜落を見たので、自己の職務では無いが事重大と觀て取り、獨斷で別の戦闘旗を持ち來り、大橋の中桁に引揚げて一時の急に應じたのは、是又機を誤らなかつた措置だと艦長より賞詞を受けた。

五月二十七日の晝戦で、早く既に大敗した敵艦隊は、其の夜更に我が驅逐隊、艇隊の襲撃を受けて全く四分五裂の状態に陥り、其の大部分は大損害を被つて、殆ど戦闘力も航海力も失つて互に相分離し僅にネボガトフ司令

官の率ゐてゐたニコライ一世以下の五艦のみが、一團となつて鬱陵島の方へ遁走した。但し此の夜戦で我が方でも三隻の水雷艇を失つた。

翌二十八日の早朝三笠以下の第一戦隊を始め、他隊も夫れ夫れ豫定の行動を取つて鬱陵島附近に達し、敵を待ち受けて居た。所へニコライ一世以下五隻が進航して來たので、彼は直ちに砲火を開いた。するとイズムルードのみは全速で東方に逸走したが、他の四隻は更に應戦せず、俄に其の軍艦旗を半降し、降服旗を掲げたので、東郷長官は砲撃を止め、秋山參謀を敵の旗艦ニコライ一世に遣し、ネボガトフ司令官及び幕僚を三笠に誘致せしめたが、武士の面目を保たしむる爲め特に帯剣を許した。

斯くてネボガトフ以下は三笠に來り、東郷長官は改めて正式に敵の降服を受け、戦艦ニコライ一世、同アリヨール、海防艦アブラクシン、同セニヤークウキンを收容することになつたので、彼我互に盃を擧げて戦闘の終了を祝した。其の時ネボガトフ少將は東郷長官に向ひ、

『閣下は仕うして我が艦隊が全部朝鮮海峡を通過するものと判断せられたのか、又仕うして對島の東水道を撰ぶものと察せられたのか、あまりに能く適中したので不審に堪へない』
と繰返し質問した。之に對して東郷長官は唯、

『然う信じたからである』

とのみ多くを言はず、反つて露國艦隊が本國より一萬五千哩を航破し來つた勇氣と技倆とを賞讃した。

二十八日の戦ひは八箇所に分れて行はれて居る。これは散亂した敵を追撃した爲めである。斯くして三十八隻

の敵艦中十九隻は撃沈せられ、五隻(内一隻はロジエストヴエンスキー司令官を載せて居た驅逐艦である)は捕獲せられ、病院船二隻は抑留せられ、其の他は或は中立港に遁入して歩装を解き、或は逃走の途中で破壊若くは沈没し、兎も角浦鹽斯德に遁れ得たのは巡洋艦一隻、驅逐艦二隻(外に一隻の特務艦は本國に逃走した)のみである。又俘虜となつたのは、ロジエストヴエンスキー長官以下六千六百六名、戦死者は一萬數千人であつたが、我が方は僅に三隻の水雷艇を失つたのみで死傷も七百名に過ぎず、有繋の英國史家をして、

『嗚呼これ何と云ふ大勝利であらう。吾人は陸戦に於ても海戦に於ても歴史上未だ斯程の大勝利を見たことが無い。實に此の海戦はトラファルガー海戦に比較して其の規模が遙に大である』との讃辭を惜まなかつた程である。

同年九月五日を以て日露兩國間に講和が成立したが、此の戦役と軍艦三笠との因縁は洵に奇きものであつて最早同艦の使命を終つたと云ふ理由でもあるまいが、講和成立より五日目即ち十日の夜同艦に格納せられてあつた火薬は自然に變質した結果と覺しく、火薬庫が俄然爆發して艦體は佐世保港内水深六尋の所に膠坐し、乗員及び應援人員を合して五百九十餘名の將士、或は死し或は傷ついたと云ふ悲惨事を起した。併し此の事が交戦中に起らなかつたのは未だしもの事であつたし、且東郷長官は恰も其の日の晝に陸路上京の途に就いて居られたのは不幸中の幸であつた。

三笠爆沈後、海軍省では之が引揚を計畫し、委員を選定して向山大佐を其の委員長に任命した。仍で該委員等

は直ちに準備に着手し、三十八年十二月二十五日先づ第一回引揚を試み翌三十九年八月八日第四回目で美事に成功したので引續き同艦の大修理に着手し、斯くして此の名譽ある軍艦は復活するに至つたのである。

復活したとは云ふものゝ、最早三笠は其の使命を了つた老驥の觀があつた。若し海軍にもつと經費の餘裕でもあるならば其儘記念艦として仕舞つても決して無謀な事ではないのである。それにも拘らず、彼は獨老驥を提げて御奉公を續け、過般の世界大戦にも参加し、大正七年軍艦朝日と交代して、倭艦肥前及驅逐隊一隊と共に浦鹽斯德方面に至り我居留民の保護に任じ、同時に英米等聯合國の海軍と協同し、必要に応じて或は陸戦隊を揚げて秩序を維持したり、或は同方面に於ける獨逸軍の敵對企圖を防遏したりして聯合國の利益擁護に努め相應の働きをなした。

話は餘事に互るが、對露戦役中敵弾に破壊せられた三笠の大橋の一部は、凱旋後戦捷之記念として伊勢神宮神域に奉納せられたのである。

明治三十九年、三笠は浮揚後大修理をなした爲め、夥多い廢材が出た。それを三越商店が譲りうけて箱其の他の記念物を作り、東郷元帥に『戦屢餘材』の揮毫を請ひ、之を彫刻して夫れ／＼希望者に頒つた。それでも猶ほ澤山の材料が遺つて居たので、藤山雨田居士が更に之を譲りうけ、東京白金の邸園中に、其の廢材を以て小亭を造り、其の命名を東郷元帥に請ふた。同元帥も快く之を承諾し、『三笠』と命名して其の二字を揮毫し與へたので今や其の小亭は白金名所の一に數へられて居る。

大正十年の華府會議の結果として、軍艦三笠も廢棄艦の列に入れられ、既定の期限内に於て、爆沈か解體かを

免かれぬと云ふ運命に陥つたので、或る一部の人々の中には、早く既に保存説が主張せられたやうであつた。併し其れは未だ具體的なものでは無かつた。恰度華府會議が開かれる一箇月程前に予(著者)は「東郷元帥詳傳」を著した。すると之に關連して種々の手紙が來た中に、十二年の春、未だ會て一面識もないTと云ふ人——此の人は船員でFと云ふ船に乗組み香港に居つたのである——より東郷元帥の徳を稱へ、三笠の保存を熱望した眞心溢るゝやうな書面を受取つた。然して這は正しく國民大部の未發の意志を代表したものであらうと考へられたから、相應に長いものであるが、全文を左に掲載して見やう。

小笠原さん。

私はあなたの御芳名はよく目にし耳に致して居ますが、未だ誰からも御紹介も受けませんのに手紙など差上げまして、私の御願ひを申上げるなどはほんとうに失禮極まるやり方で御座いますけれど、併し目下の私はさうするより外に策が御座いせん。誠にあなたは高貴の方ですし私は名も無き一老書生ですから。併しながら日本國民と云ふ點と人間と云ふ點から考へますと、あなたと私と少しもそこに上下が御座いせんと言ふ強い感念から、失禮とは思ひながらも遂手紙を差上げる氣になりました。

當地(香港)在泊中毎晩あなたの御書きになりました東郷さんの傳記を涙を流しながら心讀しました。國民の教育書として稀に見る有難い御本です。此度航海中の士官の讀物として本船文庫が神戸で買ひましたものですが、私も自分のものとして日本へ歸りましたら是非一冊買つて家庭に備へます。それは本年七歳になり學校へ行きますと申す男の兒の教育の爲にしたい考からです。私は無理に陸海軍の軍人にしたい爲めでは御座いま

せん。將來子供の希望通り何れにでも向はせるつもりなので唯國民として立派な者に致したいのです。位置などはどうであらうとも國家に對する義務をよく理解させて、平時にも戦時にも自分の義務を完全につくす人間と致したい考ですから、よく此の御本を心讀させたいので御座います。

たいへんよい御本でしてお骨折を深く御禮申上けます。私はいつもさう思つて居りましたがかつて英京ロンドンでトラファルガルスクエアーのネルソンさんのあの記念碑を見ました時に、日本國民も是非とも東郷さんの記念碑をネルソンさんのその様な大きさで日比谷公園のグラウンドに立てゝ頂きたいのと、軍艦三笠はどんなにしても是非國民教育の爲めに永久に保存して頂きたいのです。東郷さんの記念碑は是非お立て下さい。それも國民からの寄附金で造つて頂きたいのです。大人も子供も皆少づゝお金を出し合ひまして日本の寶のお懐しい東郷さんの立像をネルソンさんの様に高い塔の上に立て下さい。それから軍艦三笠は日本の國家に對する軍艦を代表させる意味では是非々々保存させて下さい。私いつか東郷さんの御意見を新聞で見ました。保存させるもしないも、海軍大臣の意見一つできまると云ふ事でありました。もしさうなら加藤さん(加藤さんとあるは臣加藤友三郎男)に是非お頼み下さい。どうしてもあの軍艦だけは永久に保存させるやうにもし加藤さん(總理大臣兼海軍大臣)が聞きにならなかつたら、貴衆兩院へお出かけなさつて是非涙を流して皆様に頼んで下さい。それでも皆様が聞かれなかつたら海軍省に交渉なさつて、國民から大人も子供も海軍省の満足するだけのお金を喜捨させてあの懐しい大事なる軍艦を買ひとつて下さい。

萬難が横たはつて居るやうに思はれます。併しあなたはきつと萬難を排除して下さると確信致して居ます。

私あなたのお寫眞をよく／＼拜見致しました。きつと私の願ひを聞いて下さるやうな氣がして嬉しくてたまりませんでした。

一、東郷さんの記念塔日比谷設立の件

一、軍艦三笠永久保存の件

是非／＼御願ひ致します。日本の將來は海です。國の興亡とも海であると存じます。國民教育の爲めに滿身の勇氣を出して此の難事業にぶつかつて下さい。

神様はきつと私共の心をあはれと思召して、御開入れ下さると確信して厚く御禮を申上げて居ります。

國民が皆目醒める時です。たいへん遅うございますがそれでも目醒めぬより宜しいかと存じます。眞に世界に雄飛しますには自覺と自重とが一番大切で御座います。世界に雄飛しますのは人道の爲めです。平和の爲めに無理を云ふものをどうしてもおさへつける必要が御座います。商工業を發達せしめまして國民を養ふと共に兵備は永久只今の所必要でして（黄金時代の來る迄）國民は和戰共に備へねばなりません。人道の爲めに將來の國民の教養の爲めに、是非是非萬難を排して右の御願ひに努力して下さいまし、そして東郷さんの御存命中に二つとも決定して下さい。

もう大事な／＼國民の尊敬の中心となられる東郷さんも御年の上ですから、一時も早く取りかゝつて下さい。東郷さんの御存命中に出來上りますれば何よりです。併し急げば事をしくぢる恐れがありますから、もし東郷さんの御存命中に出來ませんければ其の後でも宜しう御座いますから、御多忙中とは存じますが國民の義務

として是非お聞き入れ下さい。

私は乃木さんのお寫眞を嘗て見て居りましたばかりに、東京神樂坂で馬上の乃木さんをおがみまして敬禮を致しましたら御答禮遊ばして下さいました。私は乃木さんをあとにも先にも其の時一度拜見致したばかりですが最早神様となられました。あゝ併し乃木さんは永遠國家を守護して下さいます。若い國民の上をあのおやさしいお年のとつたお顔で、私は東郷さんを一度も拜みません。併し東郷さんに道でお會ひすればきつと間違ひなく直ぐ見出します。丁度乃木さんの時のやうに。私お顔をお寫眞でよく／＼存じて居りますから。

あなたは、もしこれから先き御用事の爲めに東郷さんにお會ひ遊ばすかも知れませんが。其の時には名も無き一介の國民（全國民も同じ考ですと存じます）がくれ／＼も御尊體を御大切に遊ばすやう申しましたと御傳言下さいまし。お風だにおひきなされぬやうにね。

それから若し東郷さんの塔と軍艦三笠を海軍省から國民が買ひ取る時にお金が必要でしたら。私共家族三人（妻と子供と私）して少しのお金を差上げて其の中の一助と致したう御座いますから、喜捨の折には甚だお手數で御座いませうけれど、東京府下荏原郡蒲田町字〇〇一三八TK宛にお葉書を下さいませんか。くれ／＼も願ひ致します。

私はこれからジャワへまゐり地中海大西洋と乗りまはし、九月でなければ横濱へまゐられませんかから留守の妻へ申傳へて置きますから。

是非／＼お聞き入れ下さい。心からお願ひ致します。

あなたは政界にも海陸軍人にも澤山の方々を御存じです。皆様には是非お願ひして下さい。失禮を幾重にもおわび致します。呉々も御尊體大切に遊ばせ。

三月十七日

在香港F丸 T M

何と云ふ熱の籠つた書面であらう。予も三笠保存に就ては主張者の一人であつたが、今此の燃えるやうな書面に接して深い衝動を受け是非とも此の未見の友の精神を、貫徹させてやらねば濟まぬやうな氣がするので、直ちに東郷元帥を訪ふて此の書面を示した。すると之を熟讀した元帥も頗る感慨に打たれた様子で、

『いや熱心なものぢや』

と言ふてじつと考へ込んだ。そこで予は、三笠艦保存に就て益々奔走すべきにより、同元帥にも間接に一臂の力を貸されんことを懇請して内諾を得た。之が予に取つて大なる奨励となつたが、詮する所Tの熱誠が與つて力あつたのである。

大正十三年になると、追々三笠廢棄の期限が迫つて來たので、それに連れて其の保存熱も有志の間に高まつて來、日米俱樂部員は三月十四日臨時總會を開いて三笠保存の決議をなし、同十八日同俱樂部の代表者二十餘名は先づ米國大使館にウーズ大使を訪問し、三笠保存運動の趣旨を開陳し其の賛成を求めて快諾を得た。

又一方同月二十四日には有志十五名が帝國ホテルに會合して三笠保存會に關し第一回創立準備相談會を催し、

三笠保存の運動に關しては社會各方面に賛成者を得て保存會を設立し然る後大々的に國民運動を開始する事に決した。

之と前後して各新聞紙上にも、同艦保存を主張するの聲日増しに繁く中には繰返し堂々の論文を掲げて、輿論の喚起に努めたものさへあつた。是等の效空しからず幾もなくして遂に三笠保存會は設立せられ、會長(阪谷)副會長(斯波男)も定まり遂に東郷元帥を名譽會長に推す事になつた。

三笠保存に關する有志の熱心なる運動猶ほ續けられ、内に於て輿論の喚起に努むると同時に、各其の大使を通じて英、米、佛、伊等強國政府の同意を求め、悉く成功したので、爰に皇國の自主獨立を守護した最大記念物たる三笠は、永久に其の保存を保證せらるゝ事となつた。

仍で横須賀鎮守府にては、同艦體(下甲板以上)を白濱海岸に据付け、保存工事に着手し、大正十五年十一月を以て之を竣つたので、同月十二日、長くも皇太子殿下の行啓を仰いで盛大な保存記念式を舉行した。而して殿下の思召により、三笠甲板で博恭王殿下を始め戰役當時の乗組將校と共に御撮影遊ばされ、別に又東郷元帥とお竝のものもお撮影になり、それより式場に臨ませられた。横須賀鎮守府司令長官の保存工事報告、海軍大臣の式辭、三笠保存會長の答辭が了ると同會名譽會長たる東郷元帥(同元帥は前日菊花章頸飾を親授せられた。當時臣下に)が恭しく御前に進み、左の祝辭を讀上げた。

記念艦三笠保存工事竣り、爰に長くも皇太子殿下台臨の下に其の保存記念式を擧げらる。本艦の光榮至大なりと云ふべし。惟ふに本艦は明治三十七八年戰役に際し、終始聯合艦隊の旗艦となりて陣頭に立ち、前には旅

順口及び黄海に奮闘し、後には日本海に鏖戦し、以て全軍の將卒をして軍人の本分を盡すに遺憾なからしめたるは、洵に我海軍史上の一大光彩たらずんばあらず。而して今や翕然たる中外の同情に依り、其の保全の方法爰に確立するに至りたれば、庶幾くは永久に此の雄姿を示し、以て益々 皇國の威名を宣揚し、併せて當年忠魂を捧けたる烈士の功績を傳ふるを得んか、滿腔の感激を以て恭しく祝す。

斯く三笠は目出度海軍より保存會に引渡されたのである。

あはれ千萬年に互り同艦を訪ふ人々が其の甲板に佇立みて激戦當時に於ける名將の面影や、其所に演ぜられた種々の美談逸話を偲び开を皇國民たるの修養上に資せらるゝならば、艦靈も定めし無上の本懐であらう。

終りに臨み、長けれど 明治天皇の御製を掲げ奉りて此の物語を結ぶこととする。

戦ひしときをぞ思ふしらなみの

かへりし船をみるにつけても

東郷元帥母堂益子刀自と
テツ子元帥夫人

元帥母堂益子刀自

貴方に改善の大覺悟はあらるゝか

たしか大正五年の二月と記憶する。或る日突然某といふ男が、某市市長の紹介状を持つて尋ねて來た。然うして是非面會したいといふので會ふて見ると、

「私は、日露戦争當時、偶とした心得違から法を犯し、入獄の身となりましたが、獄中で新聞雜誌等を閱讀しましたるに、閣下に関する種々な御逸話が載つてをります中に、御母堂様が御在世の折の、數々の美談善行を記したものが御座いまして 天皇陛下に對し奉る御真心や、閣下に對さるゝ、眞の御慈愛の深さなどを拜讀致したるに、何とも云へぬ尊さ有難さが身に染み渡り、從來の自分の淺ましき行爲が、犇々と心を責め、居ても立つても堪へられなくなりましてので、自今は必と心を入替へて、眞人間となり、一分でも一厘でも善事を爲し、お上の御恩や世間への、お詫をせねばならぬと覺悟致し、出獄後は、如何なる困苦をも、入様より受くる侮辱をも耐へ忍んで、力限り根限り少しでも善事を積うと、十餘年來奮闘を續けて居りますうち、何時しか市長より認められましたて、目下では勿體なくも、或る慈善會の會長に推され、次第に世間の信用も厚くなつて、

安樂に世を送つて居られます。これも只管御母堂様の御高德のお蔭で御座いますので、何時か一度閣下にお目通りして、此願末を申上ようと存じ、今般上京致した次第で御座います。つきまして此の茶碗は、由基田の土で製したもので御座いますので、持参致しましたから、何卒御母堂様の御靈前にお供へ下さいまし』

と云ふて其れを差出したよ。そこで此方は彼に向ひ、
『一旦悪に染んだ者が、善人に返らうとするには、餘程の克己心と勇氣とが無くば、仕送けられぬものぢやが果して貴方にそれだけの大覺悟があらるゝか』
と訊ねて見た。すると彼は兩眼に涙を浮べて、

『どんな事が御座いまして、誓つて今日の決心を變へませぬ』
と誠心を面に表はして答へたので、

『それ迄にお篤いお志の品ならば、頂戴して亡母の靈前に供へませう。亡母もさぞ本懐でありませう』
と答へて、それを受納したが、世間といふものは妙なもので、此方が全然知らぬ間に、思ひも寄らぬ方面に影響を及ぼすものぢやね。

此の物語りは、大正十年編者が『東郷元帥詳傳』を脱稿する際話されたもので、元帥母堂益子刀自の賢徳を、最有力に裏書してゐるのである。されば之を機として、編者は同刀自の生涯を略説し、以て婦徳の涵養に資する所あらしめたいと思ふ。

偉人と賢母

『平八殿！ 御奉公を大事にナ』

此の一語を遺言として、明治三十四年四月十日の曉天、梅花馨る一室に愛兒・愛孫達に圍繞まれつゝ、眠るが如く逝いた益子刀自が、九十年の經歷は尊くも床しい生涯であつた。

偉人の母には賢婦人が多いとは、よく世人の口にする所であるが、實は賢婦人に育てられたが爲め偉人になつた者が多い、と云ふ方が適切な評言ではあるまいか。縦し偉人たるの天分を具へた者にしても、之に培つて其の眞價を遺憾なく發揮せしむるには、幼時よりの躰が與つて力ある場合が多いのは否むべからざる事で、隨つて彼の孟母の三遷は、萬代不易の活教訓である。

古今の歴史や史傳を繙いて見ると、偉人と賢母の關係を證據だてる事蹟は、枚擧に遑ない程あるが、其の中でも、東郷元帥と益子刀自ぐらゐる、其の色彩の鮮明なのは稀であつて、刀自の爲人や、言行を知つたならば、誰でも直ぐに、斯の婦人の兒に、凡庸者が出来よう筈は無いと、首肯するゝであらう。

刀自は薩摩の藩士堀與三左衛門と云ふ人の三女で文化九年(皇紀二千四百七十二年西曆千八百十二年)十月五日鹿兒島で誕生した。成人後、態度より推測すると、幼少の頃にも定めし傳ふべき逸話があつたらうと思はれるが、惜いことには其等に關する記録が、何も遺つてゐず、唯漫然と確りした娘であつたと云ふ一事が、語り傳へられ七をる。又其受けた

教育とても、別段變つたことは無く、藩中一般の娘と同様に育てられ、どちらかと云へば、其の時代としても舊式の方であつたやうに思はれる。

刀自は二十歳で、同藩の士東郷吉左衛門實友に嫁した。良人は八歳違ひの若侍士で、武道は水野流の皆傳を受け、文事にも造詣が深かつたので、刀自とは似合の夫婦であつた。

一口に勝れた婦人といふても、一樣にはゆかない。譬へば鐵で綿を包んだやうに、強いうちに優しみを有つてゐるのもあらうし、また綿で鐵を包んだやうに、柔いうちに凛とした氣節を藏してゐるのもあらう。仍で刀自の性質は、其の執れに屬するかといふと、天分は寧ろ前者の方であつたやうに推せられるが、嫁して後異常な自製心と修養とに依つて、殆ど後者の如き第二の天性を成し得たのである。併し其の男勝の鋭鋒は機に觸れては何處やらに其の閃を示してをつた。

共通の信仰心

まだうら若い身で嫁いた刀自が、覺悟の基礎となしたのは、真心の二字であつて、之を唯一のお守りとなし、何から何まで實々しく、主婦たるの務を盡したから、舅姑は云ふまでも無く、小舅達からも深く敬慕せられて、早くも和氣霽々たる家庭を作り得た。

文武二道に達した上に、廉直を以て聞えてゐた實友は、名君齊彬侯の知る所となり、郡奉行・高奉行・御納戸

奉行等の要職に擧げられ、一意専念公務に盡瘁し、家に在ることさへ稀であつたから、家事一切は愛妻たる刀自に委せてゐた。隨つて刀自の責任はいよゝ重きを加へ、失策なればかきと願ふのあまり、勝氣な性質に似けなく、刀自は此の頃より堅固な信仰を持つやうになり、邸内に祀つてある、祖先紫尾大明神に、毎朝必ず祈念するを始めとして、菩提寺の墓參は勿論、其の外に毎月必ず五社詣をするやうになつた。五社詣といふのは、鹿兒島にある有名な五神社に、日を定めて毎月參詣するので、信仰家の一種の風習になつてゐたやうである。

此の刀自の信心を軽々しく看過してはならない。といふ譯は、東郷元帥の信仰上に、遺傳的に重大な關係を有してゐるからである。

申すまでも無いが、元帥の信仰は決して迷信でも妄信でも無い。即ち正義と至誠とを以て、天佑神助を被るの唯一の道とせる、人間觀念の最崇高なるもので、堂々これを戦時の命令・訓令に高調してゐる處、何人にも敬虔の念を起さしめずにはおかないのである。

仍で歸つて再び益子刀自の信心に想到なせば、兩者の脈管には、信仰的共通の血が流れをることを、誰が否み得やう。編者の如きは、唯天意の不可思議なるに驚愕するのみである。

寛嚴宜しき教育

刀自は頗る子福者であつて、二十三歳の時長男四郎兵衛實翁を設けたのを初とし、四十一歳までに五男一女を

擧げた。其の中で三十六歳(弘化四年)の時設けた四男仲五郎實良こそ、後の東郷元帥其の人なのである。

子女の教育は、刀自が全力を傾盡して従事した所で、其の注意の周到であつた事は、洵に敬服の外はない。然うして高潔な品性と、卓越した識見とを涵養するのを最大目的としたやうに推察される。一例を擧げると、子女等が臥せつて居る側を通る際など、必ず足の方を過ぐるやうにした。

『忠臣節婦たらしめようとする者の、枕頭を踏歩くやうな事は、自然彼等を輕蔑することになり、延いては彼等をして、自屈の念をも起さしめることにもなるのであるから、然様な儀は親と雖も慎まねばならぬ』
と、常に家人を誡めてゐた。

東郷元帥が天性の偉人であることは、往々耳にする所の評言である。成る程全然素質の無いものなら、如何に教育せられやうとも、其の域に達することは不可能であらうが、元帥は寧ろ修養の偉人であつて、然も其の修養は母堂の指導に依つて基礎の大部分が成されたのである。

一體元帥の少年時代は、敏捷無類であつたと共に、神經過敏の方で、今日の元帥とは似ても似つかぬ様子をしてゐたことは、元帥の嫂たる東郷吉太郎中將の母堂が、親しく編者に語られた所であつて、苟も元帥を研究しようとする者に取つては最大切な着眼點であらう。

十歳で神童、二十歳で才子、三十過ぎれば平凡の人、と云ふ俗語があるが、これに適合する者の餘りにも多いのは、世人の一般に知る所であらう。何うして神童なるものは、斯うした面白からぬ運命に支配せられるのかと云ふと、主として夫れは側にゐる者が悪いので、唯無暗に當人を煽動け、其の天賦の才を濫發せしむるので、當人

は得意になつて小成に安んじ、些の修養も心がけないから、成人に従つて才能は涸渴し、終に平々凡々に墮してしまふのである。處で若し其の指導善きを得、神童と言はれる程の天才をグツと引締めて、修養含蓄に重きを置き、以て大成を期したなら、必しも早老に終るべきではあるまいと思ふ。元帥の場合が最其の著しい例で、才子肌の少年が、將に將たる大偉人となつたのも、母堂益子刀自の寛嚴宜しきを得た教育が、與つて力あつたものと思はれる。

元帥が十歳の時、彼は自分の敏捷を試すため、或る日田甫の中を流るゝ小川の water 際立つて、川上へとのほつてゆく小鮒の群を目がけ、小刀揮つて一撃復一撃、瞬間に數十匹を切つて、見る人を驚かせ、得意満面であつたが、隣人より此の様子を聞いた益子刀自は、我子を膝下に呼つけて容を正し、

『武士は大敵を破つてこそ譽ともなれ、小魚を捕つたことが何になる。それを自慢にするやうな卑しい心がけでは行末が思ひやられる。さやうな業を譽る人があつたなら、愚弄されると考へて、恥づかしく思へ』
得意の鼻を折られた少年は、其の時こそ不平満々であつたが、母の道理ある諭には反抗もできず、幾もなく、成る程と合點したとのことである。

皇國婦人の典型

前項に記載した如く、文久三年六月、英國艦隊七隻、鹿兒島灣に侵入して、薩英戦争が起つた。此の時元帥十

七歳の初陣で、今將に我家を出で、戰場に向はうとした。」

『負くるな！』

透通つて金鈴を振る如き聲が背後に響いた。少年は振返つて詰つと背後を見ると、其處には、姿凛々しい母が佇んでゐて、優しくも勇ある眼に激励の視線を放けて、固より一滴の涙をも見せず、ゆく少年も亦莞爾として、溢るゝ勇氣もて目禮し、壯烈豪快の氣分は、母子の胸から胸へと漲り通つた。

良人と子供達の出陣を見送つた刀自は、直に大鍋に溢るゝ程薩摩汁を製り、家僕二人にそれを擔はせ、自身は簀笠に身を固めて、折しも荒狂ふ暴風雨をもともせず、陣所々々を訪問れて、开を振舞ひつゝ士氣を勵し、今しも海面に突出たる岸の邊へとさしかゝつた。其の時早し敵艦より放つた巨弾一發喰を生じて、飛來り、益子の立る側の岩頭を砕いて爆裂した。其の勢に二僕はワツと叫ぶと共に、大地に尻餅ついてへたばつた、が意氣烈々たる刀自は身動もせず、右手を懐劍の柄にかけて、渦巻く砲烟の裏に轟と立つた。折しも吹來る一陣の強風に笠飛び元結切れて黒髪サツと流れ躍く明眸に敵を睨んだ姿は、殺伐の戰場に一輪の花を點じて凄麗いふ許りなくならば其の儘繪にも遺したき好風情であつた。

時は過ぎて明治十年となり、西南の變は起つた。さうして東郷家の長男四郎兵衛實猗・三男壯九郎實次(古左衛門二男祐之進・五男四郎左衛門實武は既に故人となり四男たる元帥英國留學中)は薩軍に投じ實猗は負傷し、實次は戦死したので、戦友等其の屍を毛布に包み假埋となした。之を聞いた益子刀自はいとも本意ない事に思つて、亂が平定すると直ぐに假埋葬の場所に到り

鋤の類を愛兒の遺骸に觸れたく無いと他人の力をも借りず唯一人で、赤手に土を掘つては息み、息みては掘り十指の破れ傷つくを物ともせず、到頭遺骸を發掘し、改めて之を菩提寺に鄭重に埋葬したので、开を見聞した人々は、孰れも刀自の慈愛と氣性とに舌を巻いて驚嘆し、今も郷里の一話になつてゐる。

斯やうに烈しい性質ではあつたが、寡婦となり、兒等に嫁の出來てから後は、一切其の意見に従ひ、苟且にも干渉がましき事は仕なかつた。さうして毎に親戚や知人の婦人達に向ひ、

『善良な妻となるは固より大切な事であるが、善良な姑となるは一層大切な事である』

と戒めてゐたさうだ。されば嫁達の仲は實に親子よりも親しく、元帥夫人の如き毎々感涙に咽んだ程で、和氣霽々たる家庭には笑聲絶えず、一度其の家庭に這入ると誰でも、忽ち温潤の氣を感じ、何處となく和な心持になつたさうだ。

東郷元帥は人も知る如く、浪速艦長として日清戦役の當初、清兵を搭載しるたる英國汽船高陞號を撃沈し、英名を世界に轟かしたので、東京上六番町なる元帥の留守邸を訪ふて、祝辭を述べる者も多くあつた。時に八十三歳の高齡なる益子刀自は、これ皆天子様の御威徳に依るもので、と只管感激して一言も愛兒の上を語らず、且家人に向ひ、いよゝ萬事に謹慎して、一意唯皇軍が終局の目的を達するやう、神佛に祈願を凝らすやうにと戒めてゐた。その後皇軍は海に陸に連戦連勝し、就中海軍は黄海の大海戦を始として、旅順・威海衛の占領、澎湖島の攻略、臺灣の討伐等、目醒しい働をなしたが、東郷元帥は少將に昇進し、常備艦隊司令官として、大功を建て

無事凱旋して、久々で家に歸つた。すると益子刀自は、之を迎へて上座に請じ、

『これ皆天子様の御威光で、何とも申上やうは御座りませぬ』

恭しく兩手を突いて丁寧挨拶したので、敵に向つては鬼神の如き元帥も只管感激の外なく、これ亦平伏したのみで、言葉も出なかつたと云ふことである。洵に刀自の如きは、皇國婦人の典型として、尊敬すべき人では無いか。

テツ子元帥夫人

一

東郷元帥が、皇國軍人の權化であるに對し、夫人テツ子刀自は、實に日本婦道の結晶ともいふべき方でありました。

一體日本の婦道は、世界獨特のものであつて、他國に於て見られない多くの美德をもつてをるのであるが、たしなみといふことも、正しくその中の一つであると存じます。尤も、このたしなみといふのは、婦人に限つたものではないので、あらゆる人々の必ず持たねばならぬ、日本道義の一特色なのであります。

例へば、政治家には政治家のたしなみが必要であり、軍人には軍人、學者には學者、實業家には實業家、藝術家には藝術家、農民には農民のたしなみが、各必要である、といふやうに、世間萬般の事、一としてこれが大切でないものはありません。

さて、それなら、このたしなみといふ言葉の内容は、どんなものかと申しますと、説明はなかなかむづかしいので、見識といふと固くなりすぎるし、覺悟といふと改まりすぎるし、廉恥といふと強すぎるし、そんなものよ

り、もつと潤のある、ゆかしい觀念から發してゐる人間味の豊かなものであります。

されば、何業によらず、このたしなみを忘れたとき、そこに醜惡い姿が映しだされ、他をして眉をひそめしむるに至るのであるが、就中、婦人にとりて、このたしなみは最も大切なことで、婦徳を完からしめるに、與つて力あるものであります。

そこで元帥夫人テツ子は、最もよくこのたしなみといふことを理解し、さうして、明治十一年、十七歳で東郷家に嫁がれてから、昭和九年、元帥と別れるまで五十六年間、絶えずそれを實現しつゝ、夫君を扶けられた方でもあります。但し、そのたしなみたるや、他人のそれと異つた點があつて、夫君元帥に對する特殊のたしなみ、言ひ換へると、東郷夫人式たしなみとでも申ませうか、その實行に就いて、夫人が苦心の跡が、數々窺はれるのであります。

かやうに申しますと、夫人の平生は、何だか一舉一動にまで細心の注意を拂ひ、いつも戦々競々としてをられたやうに推測されるかも知れませんが、決してさやうなものではなく、誰でも、一度夫人に面會せられた人ならすぐに氣がつかれたであります。夫人は至つて朗な、嬉りのない方で、聲なんかも、太くて寂のある、どちらかといふと男まがひで、何等の隔てもなく話されるところ天空海潤の趣があつて、少しも氣がおけず、それであるて、全く芝居氣のなかつたことは、夫君元帥と好一對でありました。

私は幼時から、傑れた人に會ふのが極く好きで、自分ながら、一種の性癖と認めるほどであります。隨分求めて各階級の評判の高い人に面會したり、談話を承つたりしたのであります。大概の人は芝居をやる。尤も

それに多少の差はありますとしても、全く芝居をやらない人は、先づないというてもよいからであります。即ち、談話なり應對ぶりなりに、心にもない粉飾を施して、自分を實質以上に認めさせようとするので、或は故に謙遜して見せたり、或は鷹揚に構へて度量の廣きを衒つたり、或はしきりに慷慨悲憤して國士を氣取つたり、或は慈悲や人情は自分の専有物だといふやうな顔をしたり、或は豪放磊落を装つたり、或は直言硬骨を賣物にしたり、實に千差萬別ではあるが、要するにこれ等は皆芝居をする人なので、その言動を無條件で受入れると、飛んでもない馬鹿を見ることがあります。尤もこれは、主として男子に就いていつたのであるが、謂ゆる賢婦人や女丈夫にしても、概ねこの範圍を脱することができない。

ところが、その中で、東郷元帥及び夫人に限り、微塵も芝居をされなかつた。従つて私なども、始終その言動の全部そのまゝを、安心して信じ得られもし、また信じて間違ひもなかつたのであります。

さて、それなら、かういふ嬉りのない夫人のたしなみとは、一體どんなものかと申しますと、その基調として先づ第一に、實によく夫君元帥の氣持を知悉してをられた、いや知悉といふよりも、寧ろ同化してをられた、といつた方が適當かも知れない。見方によつては、外と内とを分擔し、御夫婦合體の誠心の結果が、古今絶無の聖將東郷を、産出したともいへるのであります。

一體、東郷元帥といふ方は、何事にも、一旦かうと決心したが最期、傍目もふらず眞一文字に、その決心したところに向つて邁進されるのが常であつて、さうなつた場合には、たとへ金剛鐵壁といへども、これを遮ること

はできないのでありますから、まして他の掣肘によつて動かされるなどは、思ひもよらない。

されば、かうした際に、傍から助言や注意をするのは、たゞに無益であるのみならず、事と品によつては、徒に元帥に、幾分なりとも、苦痛を興へることにならぬとも限らない。その呼吸を、夫人はよく吞込んでをられてよしんば、氣づいた點があつたにしても、決して元帥の氣持に觸れず、速くその範圍外から、判らぬやうに、繕ひなら繕ひを、してゆくやうにしてをられた。大體そこを指して、私は東郷夫人式たしなみと申したのであります。

尤も、これは夫君の性格によるもので、夫人が積極的に働きかける方が、却つて夫君を扶けるやうになる方もありますから、あながちそれを否定するのではないが、とにかくテツ子夫人の採られたる内助の方法は、前申したやうな仕打なのであります。

元帥が日露戦役より凱旋せられた翌年、即ち明治三十九年の四月一日、戦役の功により功一級金鷄勳章及び大勳位菊花大綬章を授けられた、その當日でありました。部下の參謀であつた私は、副官の人々と共に東郷邸にまゐつてをつて、元帥——實際はまだ元帥の稱號は賜つてをらないが、便宜上元帥と呼びします——が官中より退出、歸邸せられるのを待つて、記念の寫眞を撮ることになつた。

ところが、菊花大綬章、桐花大綬章、金鷄勳章、瑞寶章等を正装の上衣に着ける、その場所や順序に就いて、正確に知つてをる者がない。あゝだらう、かうだらうと、各自勝手な臆測を逞うしてゐると、元帥は例の主義で獨斷にまかせ、これで宜えさ、と定めてしまはれ、夫人に針と糸をもつて來させて、假りに縫ひつけろと命じ

られた。すると夫人は、ハイ／＼といひながら、初と私を薩に招いて、もし間違つてゐると、いつまでも恥を貽すことになるから、あなたのお考へのやうにして、官内省にお尋ねくださつた上、主人におつしやつて頂きたいとの注意でありました。

私も、なるほどと思つたので、副官に相談の上、式部職に問合せたところ、元帥の主張も我々の考へも、違つてゐた點があつたので、式部官の指圖通りに直し、元帥も恥を貽されずに済んだのであります。

これなどは、ホンの些細のことのやうであるが、一事が萬事で、いかに夫人の仕方に溜みがあり、且つ心づかひの優しいかゝ窺はれて、我々は、得もいはれぬ、ゆかしさを覚えるのであります。

このとき元帥を庭前の凹地で撮影したのは、海軍省の艦政本部に勤めてゐた、市岡といふ理學士で、その出来上りを見ると、まことに立派に撮れてゐるのみならず、その寫眞を仔細に關すると、菊花大綬章の中心にあるルビー色の圓形の部分に、立樹が一本鮮明に寫つてゐるのが見られました。正しくそれは栗樹で、この栗樹こそ、夫人にとつては、この上もない記念なのであります。

と申しますのは、この東郷邸は、専ら夫人の奔走により、手に入つたもので、それまで間借をされてゐた芝の田町から、明治十四年に引移られ、夫妻初めて一家をもたれたのでありますゆゑ、その記念として、引越しと同時に、夫人自ら庭前に栗の實を蒔かれた。それが芽生え、だん／＼生長して、二十五年を経た當時は、見上げるやうな大樹となつた。それが端なくも、夫君の最大最高の勳功を表彰する、菊花大綬章の、最初の寫眞に寫つたといふは、何といふ奇しくも興味ある話であります。

しかも、或る意味から申しますと、菊花章を頂戴せられた大功績の裏には、夫人の内助の力が加はつてゐることを、暗示せられた、天意とも解せられるのであります。

更にまた、夫人の美德を物語る、次のやうな話もあります。

それは、前の話と同じ年同じ月の二十一日、私は元帥竝に家族の方々を、代々幡の自邸に招待いたしました。その折、私方の名物男として評判の高かつた、山口用助事通稱重五郎といふ老僕を、元帥御夫婦に紹介いたし、その席に於て、元帥より觀世音菩薩といふ名號を、彼のために書いてお貰ひしたのであります。

この老僕は、十六歳で初めて私の祖父に事へてより、明治三十九年まで五十七年間、眞心を以て一貫し、その間御維新前後の如き、父豊岐守長行の密使を受けて屢々命がけの働をなし、忠實にその使命を果したのであります。

彼は、後明治四十五年に至り、時の東京府知事阿部浩氏より、木杯竝に賞状を受けたが、その賞状の冒頭には「資性廉直幼にして能く父母に事ふ」とあり、それより、その忠誠の數々を挙げ「他の僕婢その薫化する所となり、皆能く主に仕ふといふ。以て至誠人を動かすものあるを知るべきなり、洵に奇特とす」と結んであるほどの篤實者なのであるから、これでは元帥の氣に入らぬ筈がない。

その經歷を聽かれた元帥は、「忠僕ぢや」と力強い一語を以て彼を激賞し、夫人は眼に涙を浮べて、彼を眺め入られたほどでありました。ところで、この老僕は、大正五年七月、八十二歳の高齡を以て大往生を遂げました。

が、私は彼が生前唯一の希望であつたところの、私の家の紋所三階菱を、その墓石に刻んでやり、墓をも、淺草新谷町の幸龍寺と申す寺の、私方の墓地に建てよやつたのであります。

それより更に十一年を経た昭和二年、幸龍寺が、淺草より烏山に移轉した後、間もない頃、私は元帥に隨行して、同所の大迫大將を訪問したことがあつた。その途中、話の序に、私は元帥に向ひ、

「先年御紹介した忠僕重五郎の墓は、この近所にあります」と、お話すると、元帥は、いん顔をして、「淺草ぢやなかつたのかね」と、言はれるので、

「つい先頃までは淺草にありました。併し閣下は、どうしてそれを御存じですか」と尋ねますと、

「ウム、家内が先年、あなたから重五郎逝去のことを聞いて、あなたの執事に墓所を訊き、參つて来たから知つてゐるのぢや」

と、無造作に答へられたが、それを聞いた私は、感激に打たれざるを得なかつた。

何といふ同情深い方だらう。よし知事から表彰せられた忠僕であるにせよ、たゞ一度面會されたに過ぎない彼のために、コツソリ墓參りをせられた一事さへ、世にも有り難い篤行であるのに、逝去せられるまで、到頭一言もそのことを私に漏されなかつたに至つては、たゞその淑徳に、頭が低るばかりであります。

實に、夫人の如きは、たしなみの神髓を體得せられた方で、婦人の模範として、仰ぐべきであります。

夫人が、襷がけ尻端折で、元帥の書齋の掃除をしてられたのを、私が女中と間違へた話は、かなり世間で知つてをられますが、まだ、それどころの騒ぎではない。あるとき、甲斐々々しい形で、炎天の下に、庭の草

むしりをしてをられた後姿を見て、復しても粗忽な私は、オイ婆さんと聲をかけ、振返られて初めて夫人と気づき、穴にでも入りたきほど赤面したことがございました。

夫人のかうした舉動は、決して有閑気分の氣紛れなどからではなく、家事にいそまれるあまりからでもありませうが、一つは、夫君元帥を慰めるためであつたと存じます。

一體、盆栽や草花類は、元帥の少い楽しみの中の一つで、従つて庭といふことには、かなり關心をもたれてをりました。

されば、四六時中、御皇室の御上や國家の事に肝膽を砕いてをられる夫君の心勞を思ひやり、せめては庭でも綺麗にして、幾分の慰めにしたいとの、ゆかしい心づかひからでもありましたらう。

或る年の、秋もはや名残となりて、木々の梢は錦を彩色する頃、例の如く庭の掃除を了へて、縁側に腰うちかけ汗ばんだ肌を拭ひつゝあつた夫人は、

庭のものをはきしあとに楓葉の

ちりし模様のおもしろきかな

と、一首の和歌を口ずさまれました。はよくとは、掃くといふことの九州の方言であります。殊に、ちりし風情とでもいひ易いのを、模様とせられたところに、衣服を聯想せられし婦人氣質が見えて、面白いでございませんか。これはその場に夫人と一緒にをられた甥御の東郷吉太郎中將より承つたところであります。

重ねて申します。元帥が樸素な英雄であつた如く、夫人はまた樸素な内助者であつて、世間に知れるやうな内助の仕方ではございせんでした。即ち元帥の氣持を悉皆呑込んだ上で、微塵も、これが障礙にならぬやうになしつゝ、しかも後顧の念なからしめ、以てその全精神を、思ふ存分忠誠の二字に捧げ得られるやうに、仕向けられたのであります。即ちたしなみの衣を以て眞心を包みつゝ、五十六年間、獻身的に盡されたことは、眞の意味に於ける日本婦人の鑑といつてよろしいであらう。内助らしからぬ内助、これが夫人の本領なのであります。

夫人が逝去の、直接の病氣は肺炎でありましたが、その晩年は實に多病であつたので、東郷家の主治醫たる加藤直次郎氏と共に、永年元帥夫妻を診察してをられた西川義方博士の話によると、夫人は、昭和三年頃よりリョーマチが起り、だん／＼それが昂じて来て、同六年以後殆ど四年間といふもの、全く病褥に親しむ身となられたが、まだその外に、喘息があり、心臓が弱り、軽い腦溢血にも罹られたのであります。その逝去後、同博士は私に向ひ、感慨無量の面色で、元帥が忠誠の數々と、夫人が病氣の數々とは、正しく正比例をなしてゐますなど、言はれましたが、私も全然同感であります。

鹿兒島では昔から、夫婦の一方が亡つてより一年経たぬうちに、他の一方が自然に跡を追ふやうになるのは、よく／＼深い縁であつて、これこそ本當の偕老同穴である、との言ひならはしがございませうが、元帥夫妻は、これを現實せられたばかりか、夫人の危篤に陥られたのが元帥が危篤に陥られたのと同じ二十七日であつたのも不思議であるし、その葬儀が自然に元帥の薨去せられたのと同じ三十日となつたのも、思へば妙縁に外ならないの

であります。

必ずや夫人の靈は、この世に於けると齊しく、永久に皇國守護に、忠誠を捧げつゝある元帥の神靈に對し、内助の限りを盡してをらるゝであります。

二

私の友人に、

『姑が賢婦と聞いて破談にし』

と川柳めいたものを作つて、どんなもんだと顎を撫でゝゐる變物がある。ちよつと聞くと、従順なるべく馴けられた古來の我が婦道を、破壊するかのやうに思はれるが、本人の主張は、なか／＼もつてさやうな不埒なものではなく、頗る行届いた諷刺の名句であると自讃の後、

『我輩も眞の賢婦を尊敬することに於ては、敢て人後に落ちる者ではない。併し、それと同時に、世間には似而非賢婦の多いのを忘却してはならない。彼女等は賢婦と謂はれたいために、人前をさもしをらしく振舞つてゐるが、一度その裏面を覗くと、放埒で無慙で、たゞもう呆れるの外はない。さうしてかういふ輩に限つて、ねち／＼と嫁いびりをするのが定例だから、どうしても可愛い娘なんか嫁られるものか。賢婦と聞いて破談にしといふのが、ちもそこら發するのさ』

と、したり顔するのであります。

あるとき私は、この友人に、ツツ子夫人の性格や、嗜みを、仔細に話したことがある。すると最初のうちは、何となく侮蔑の色を浮べて聽いてをりましたが、だん／＼眞面目になり、わけても夫人が賢婦ぶらない點に痛く感じ入つたと見え、

『そんな方だつたのかい』

と慚愧したやうに大息をつきましたが、それからといふもの、前記の自贊の名句(?)を、あまり口にせぬやうになりました。

夫人は音楽に興味をもつてゐられた。併し、それはピアノとかヴァイオリンとかいふ西洋楽器よりも、純日本ものを好まれ、取りわけ三味線に興味を感じてをられ、長唄の嗜みさへあつたやうに思はれます。たしか明治四十一年の正月のことだつたと記憶する。一夜、元帥は自邸に極く懇意な者數名を招いて小宴を張られたことがありまして、餘興に義大夫があり、續いて親戚方のうちに長唄を謡はれた婦人もありました。やがて宴を終り、主客別間に移りますと、元帥の發言で、めい／＼隱藝をやることになつた。すると元帥が、

『いつちから始めよう』

と言はれ、きちんと坐り直して、どういふわけか丁寧に疊んだ手拭を膝にかけ、その上に両手の指を揃へておくと、顎を揺るゝ兩眼を半閉ぢ、

『都々／＼下手でもやりくりや上手……………』

と謡はれたその聲は、寂があつて魅力に富み、しかも節廻しの巧さに、初めて聞いた我々は、アツと驚いてし

まひました。テツ子夫人は最初より元帥に附添ひ、手拍子打つて唄の呼吸を授けられてをられました。『やりくりや上手……』と誦ひをさめられると同時に、ヨ一惜しい／＼アツヘツへと、遠慮もなく笑はれたその無邪氣さ加減に、私共も釣込まれて一同ドツと沸いての大騒ぎ、續いて岩村副官(現中將)が、これまた自慢の美音を張り揚げ、お手のものムヨサコイをやり、いよ／＼私の順番となりました。さア弱つた！口先では勝手な熱を吹いて、何でも囁つてゐるやうなことは言つても、根が不器用の上にどういふものか、唄となると、甚く調子が逸れて、甚句一つ満足に詠へないのである。そこを附込まれるわけでもあるまいが、

『さア小笠原君、何んかやらんか』

と元帥の督促頗る急で、進退谷るも大袈裟だが、何にしても困じはてまひました。

すると夫人が、ニコ／＼笑ひながら近寄つて来られ、

『詩吟ならおできでせう！詩を吟じなさいよ』

と耳許で囁かれた。

有り難いツ！巧拙を措いて、詩吟ならやれないこともない。と遂に度胸を握ゑて、日本海々戦後元帥に呈した自作を吟じたのはいゝが、あまりトチツてゐたので、轉句に至つて忘却し、焦慮れば焦慮るほど考へ出せないのです、どうにもしやうがない。たうとう、

『忘れましつ』

と悲鳴を擧げたきまりのわるさ！今想ひ出しても腋下に汗が流れるやうな氣がいたします。併し、過ちの功

名とでも申しませうか、私の周章てた態度がよほど奇妙であつたと見え、大抵の場合微笑ぐらゐで済みます元帥が梁の塵も飛ばんばかりの大聲を出して呵々と打笑ひ、

『今夜の餘興では小笠原君が満點ぢや』

すると夫人も、これに和して、

『本當に面白うございました。小笠原さん。御苦勞様』

私として微笑でお茶を濁す外はありませんでした。これも今となつては、たゞ懐しの想ひ出種となるばかりでございませう。

大正十三年、佛國では、同國の文士クロード・ファレルといふ人が作つた、『ラ・ペタイユ』(戦争)といふ脚本を、映畫にした。これは日本海々戦を背景とし、日本海軍將兵の忠誠を賞揚したもので、早川雪洲の扮する司令官の副官が、主役となつてゐるのであります。今でこそ直接なり間接なりに、日本海々戦を取扱つた本邦映畫は澤山出来てをりますが、大正十三年頃には、日本海々戦はさておき、海戦に関する映畫と申しては、私が原作し、愚息明峯が撮つた『水兵の母』が、やつと出来上つたからのものでしたから、右『ラ・ペタイユ』は偉い評判で、その關係者から私に、ぜひ東郷元帥の觀賞に供したいとの交渉があつた。私も至極結構だと考へたので、遂に九月十三日、元帥及び御家族を私方に招待して、その映畫をお見せすることに決定しました。元帥も快よく承諾せられ、同日夕刻から、簡素な和服姿に打寛いで、夫人・若夫人・令孫連を伴ひ來遊せられました。さ

うして應接室で暫時休憩の後、映寫場に充てた奥座敷に移られ、間もなくピクチャーの蓄音機に伴れて映寫が始まつた。

これを超特種とし、翌朝の紙上に寫眞入で半頁を費し、『東郷さん感激の一夜』の題下に大々的に掲載した東京朝日新聞の記事の一部を、左に抜萃して見ませう。

(前略) この夕、東郷元帥は紋服姿に打ちくつろぎ、ニコ／＼といつになく上機嫌で、正面の安樂椅子に凭れてゐた。通俗國民教育會主幹の岩藤新三郎氏の説明で、『ラ・バタイユ』の幕は開く。さすがに佛國政府が力瘤を入れて、特に地中海艦隊十八隻全部を提供して實演させただけであつて、大掛りのものだ。

雪白のスクリーンにバツと光が射して、十八隻の佛艦が何れも日章旗を掲揚し、船艙相ふくんで堂々の陣を張りながら出動すると、元帥思はず膝を打つて、『ホ、偉いものぢや、よくもこんなにフランス政府が軍艦を貸してくれたものぢや。殊に日章旗を掲揚するなど想像もつかぬことぢや』

劇は股々たる砲火を交へ、今や戦ひ酣に、將兵多く倒れた。司令官の副官に扮した早川雲洲が、『皇國の興廢此の一戦にあり』といふ元帥當時の命令をそのままに、儼然として部下に傳へる場面が輝き出ると、説明者の聲はだん／＼感激に顫へて來た。正しい姿勢でこの寫眞を凝乎と見詰めてゐた元帥の面には、さすがに感激の色が漲り、

『さうぢや、さうぢや』と大きくうなづきながら、頭は靜かに下つた。側に介添役でゐた小笠原子も、ついでこの零團氣に引込まれて昂奮の面を伏せる、全く劇的場面である。かくて映畫は終りに近づき、諸兵は戦勝に

熱狂し、『戦勝は御稜威と司令長官の果斷に依ることは勿論であるが、諸兵の忠勇義烈な精神に俟つことを忘れてはならない』といつた意味のタイトルが出で、『尊き屍』の場面では、戦友の死骸が現れると、元帥は沈痛の面を全く伏せ、左腕を額に當てたまま、兩眼には一杯の涙が湛へられ、大きく胸をゆるがす、列席の者の中からは歎歎の聲さへ聞える。(下略)

やがて、この映畫も終り、元帥及び家族方は別間で休憩されたが、その際、元帥は私に向はれ、

『今晚の映寫は、眞に意義ある好い催しであつて、こつちも深い感激をもつて見物しました。唯一つ劇の中に一大尉が負傷して、同乗の外國觀戰武官に指揮を執らせるところがあるが、あれはたとへ外國で出來た劇にせよ、日本海軍としてをる以上は、こんな間違つたことは取除く方が適當であらう。日本軍人は如何なる場合にも外人をして指揮を執らせるやうなことは決してしないのであるから、この場面は除いて貰ひたい。そして、日本軍人の精神を明かにして欲しい』

と感想を述べられました。そこで私は直ぐに關係者を招き、この意を傳へたところ、一同も快くこれを容れ、早速切り取ることにいたしましたのであります。その際、關係者は更に私に、元帥夫人の御感想をも伺ふことができますならとの懇望がありましたので、その由を夫人に傳へましたところ、

『たゞもう感心してしまひましたなア、申上げるやうなことは、何もございません』

と、慎しやかなお答へでありました。が、それから兩三日経つて、私が東郷家へまゐりました際、夫人は、『先夜の映畫は本當によく出來てをりますね。戦ひの場面なんか、いまだに眼前にちらついてをります』

と賞讃せられたので、

『どこか面白くないとお氣のついたところがおありになるなら、お話しくださいませんか』
と重ねて訊ねました。すると、夫人は微笑まれて、

『さうですね、強ひて申しますなら、あの最初の方に出てくる何とかいふ公爵夫人の外出姿は、どんなものでせう。お供もつれず、御自分で大きな風呂敷包を持つていらつしやる。あれでは上流のお方として少々變ではございませんでせうか。お國の風俗を現すとしたら、もう一層氣高いやうにした方が好ささうですね』
なるほど、さうだ。實は私も見物しつゝ夫人と同じやうな感じをもたされてゐたので、全く同意を表し、このことをも早速關係者に言うてやつた。

かやうに、何事にもよく氣がつかれながら、容易にそれを口に出されないとところに、その嗜みのほどが、窺はれるのであります。

三

そも／＼東郷元帥の生涯は、至誠を以て一貫せられてゐるのでございますから、従つてその一舉一同に至るまで、盡く真心より發してゐること勿論であるが、就中その最も高潮に達した事件が二つございます。一つは大敵を撃滅して皇國を富嶽の安きに置いた日本海々戦であるし、他は皇太子殿下御輔導の大任たる東宮御學問所總裁

を拜命したことであります。

そこで、更にこの兩者に就いて考察してみると、いかにも日本海々戦は、皇國の興廢懸つてこの一戦にあつたほど大切なものだつたには相違ないが、元帥の海軍生活は實に四十餘年に亘つてゐて、この間研鑽に研鑽を重ねた戦術の所有者であるのみならず、上に御稜威を戴き奉り、下に百戰錬磨の將兵を率ゐるのだから、その胸中には、必勝の自信が漲つてゐたのである。されば御下間に對しては、必ず敵を撃滅して、宸襟を安んじ奉るべしと奉答し、部下への訓令には、新來の敵を撃滅するに當り、と決意を示し、大本營へは、敵艦見ゆとの警報に接し聯合艦隊は直に出動之を撃滅せんとすと報告してゐる。これ等は皆確乎たる自信より發したので、元帥に取りては、その海戦はさまで恐ろしいものではなかつたのでありませう。

然るに、東宮殿下を御教育申上ぐべき東宮御學問所總裁に至つては、斯道に何等の経験もなき元帥の如きは、いふまでもなく、縦し教育界の權威者たりとも、容易にお受けすべき筋合のものではない。然るに優渥なる聖旨は、終に元帥をして適不適の分別を超越せしめ、粉骨碎身もつて臣節を盡すより外に處するの道なきに至らしめたのであります。元帥は感激し、恐懼し、いひしれぬ涙にくれつゝ、この大役をお受けしました。

その直後に、私が面會したとき、私はこれまで曾て見たことのない、元帥の顔面神経の作用に驚きました。悲壯でもなく、緊張でもなく、強ひて申すなら感懷無量とでも評しませうか。何にしても一通りならざる決心の色が漲つてをりました。爾來、元帥は、人間の力もて爲し得る限りの自制を加へ、自身の一舉一動を、縦し殿下が嚮せられても、毫末も耻ぢ奉ることなきやうにと、痛烈な覺悟を定めたのではあるが、謙謹なる元帥は、尙ほ及

ばざらんことを恐れ、遂に神明に祈願を籠めるに至りました。かの有名な、

・おろかなる心につくす誠をば

みそなはしてよ天つちの神

といふ和歌は、實に、この際に於ける述懐なので、一讀して元帥の衷情が窺ひ知られるではありませんか。

されば滿身これ貞堅なるテツ子夫人が、夫君のこの切々たる心根に同情せずにはゐられる筈がありません。彼女は感懐に泣きもし、職責に恐れもしました。さうして、せめては家居するときだけでも、心おきないやう夫君を慰めることに精神を傾けつくさうと覺悟されました。ところが、これがなか／＼簡単にゆかなかつたのであります。

役に就くとき、辭めるときと、切腹するときとは、他に相談すべきものではないと、西郷南洲翁は言はれたさうであるが、東郷元帥はそれに輪をかけた獨斷主義で、大事實行の場合は勿論、苟も公務に關したことは、滅多に夫人や家族達に漏されないばかりか、東宮御學問所總裁を拜命すると同時に、酒を斷ち、煙草を斷ち、狩獵を斷ち、別莊行を斷ち、私の旅行を斷ち、その上に日曜日といへども、不時の行啓の扈從を缺かさぬため、家居して御沙汰を待ち奉るといふ情況なのでありますから娛樂をとる範圍が頗る狭い。讀書か、揮毫か、刀劍の手入れか、庭前の逍遙か、盆栽いぢりか、大體それくらゐのものであるから、夫人として慰める方法が少い。

それが、夫人にとりて惱みの種でありましたが、それは先づ可いとして、大切なお役目の上に萬一落度があつ

たら どうしよう！ 事と科によつては、泣いても叫喚いても命を捨てゝも追ひつく話ではない。かう考へ究め來ては、元帥すらも神に祈願を籠めたほどであるから、如何に朗かな天性にせよ、婦人の情として、冥助を人間以上のものに求めないではゐられないでせう。果せるかな、この際に於ける夫人の左の詠を御覽なさい。

いと重きお役つとむるその人を

守らせ給へ紫尾の明神

紫尾明神と申しますのは、殆ど東郷家の守護神のやうなもので、それには次のやうな縁起が傳へられてをります。

一體東郷家の遠祖といふのは、澁谷庄司重國の孫にあたる早川次郎實重なる坂東武士なのであります。重國は鎌倉幕府に仕へた名だゝる弓取であつたが、その子光重また、親に劣らぬ強者で、功名手柄を顯はしたその恩賞として、寶治二年——皇紀千九百八年——薩摩國祁塔院、入來院、東郷、高城等の地を授つた。そこで光重は六人の子を引連れて領地に下向し、それ／＼土地を分與へたが、次男の實重は東郷を領したので、終にその名に因みて東郷を姓とするに至つたのである。然るにこれより以前、同地方に大前といふ豪族があつて威を遠近に振つてをり、東郷が實重の領地となつてからも依然としてそこを去らずに抵抗を續けるので、實重は遂にこれを討伐すべく軍を起した。ところがその勢力侮り難く、一勝一敗、實重より數代に互りて尙ほ平定を見るに至らなかつた。のみならず實重の孫重親の代に、大前家に入道道超といふ猛者が現れて、しば／＼重親の軍を破るので、重

親激怒遣る方なく何とかしてこれを征服しやうと、日夜肝膽を砕いたが、いつも失敗にのみ終るので、憤慨その極に達し、今は是非なし、この上は死して悪鬼となり彼を打亡しくれようと、緋緘の鎧に鉄形の兜を戴き、白馬に跨りたるまゝ洞窟に躍り入り、そのまゝ再び出で来らなかつたといふ傳説である。さうして、それかあらぬかその後いくばくもなくして道超は死し、續いて大前家も滅亡して、その邊一帶東郷家の有に歸したのであります。かやうの因縁からして東郷家では、重親の靈を紫尾大明神と齋き祀り、同家の守護神と崇めてゐるのであります。されば、テツ子夫人も嫁がれたときより日々の拜禮怠りなく、吉凶共にその神慮を仰いでをられるのだから前に掲げた述懐の出たのも、自然の情であります。

御學問所總裁拜命の直後、元帥に面接して幹事たるべき内交渉を受けた後で、夫人にも面會しましたところ、さも心配さうな面色で私を凝と見詰められてをられました。平素の朗かさに似氣なく、掠れたやうな聲で、

『何分よろしくお頼みいたします』

と言はれました。その様子とこの聲音とを見聞きした私は、何ともいへぬ氣の毒さに打たれ、身の程をも忘れて、幹事を辭退する勇氣を失つてしまひました。勿論それは、元帥の至誠に感奮したのが本であります。テツ子夫人の良人思ひが興つて力あつたことも否むわけにまゐりませぬ。さうして遂に私は、月並的辭退などは抜きにして、寧ろ進んで幹事たることを快諾いたしました。

東宮御學問所を拜命した元帥は、先づ副總裁、評議員等を招集して、御修學の方針、御學科の種類、御年限等につき、慎重審議を凝すこと連日に亙りました。その列席者の顔觸を申してみますと、副總裁濱尾新男、評議員

陸軍大將大迫尙敏子、同山川健次郎、同陸軍少將河合操、同海軍少將竹下勇、御用掛白鳥庫吉博士、同杉浦重剛の諸氏で、私も幹事として列席し、會議の狀況や議題を記し、且つ諸氏の意見を筆記する役に當りました。この名前を通覽したゞけでも、この會議が尋常一様のものでなく、談論風發侃諤を極めるであらうことは、想像に難くないであります。

果せるかな、その討論の鋭利なるはもの凄ばかりで、會議深更に及んだことも稀しくありませんでした。されば、東郷元帥の重厚徳望なくば、よくその議を纏めて決を採ることは困難であつたらうと思はれました。併し元帥は、些の疲労も示さず、歸邸後更に私を招かれて、翌日の打合せをされたことも時々ありました。そのうちに御學科も定り、御用掛の任命も全部終つてからは、更に御用掛會議を開かれ、諸學科擔當の御用掛をして、それ〴〵新規に御教科書を編纂せしめ、その草稿が出来上り次第、これを私邸に持歸つて査閲せられるのであります。尤もこれは、濱尾、山川の兩氏が主として審査に當つたのではあります。いよくそれと決定するのは勿論總裁たる元帥の任務でありますから、これがまた並大抵の勞苦ではありませんでした。

それに御學科の種類も多く、倫理、歴史、地理、國文、漢文、陸軍々事學、海軍々事學、博物、理化學、法制經濟、習字、美術史、フランス語の十四課目で、尙ほこの外に武課、體操と馬術が加はり、夏季には水泳さへ御練習になるのでありますから、元帥が調査決定すべき新撰の御教科書草稿は、机上に山と積まれ、一通り眼を通されるだけでも、相當の時間を要しますので、よく午前の一、二時頃までも調べられたものです。かやうな際には私は概ね側にをりまして、質問に應じたり、相談を受けたりいたしました。テツ子夫人は、

何時も女中達は先に寝ませてしまひ——百合子若夫人はまだ嫁がれて来られませんでした——自分は端然と書齋の隣室に控へ、夫君の凝想を羨さぬやうにと、立居にも心をつけて裾捌きもいと慎しやかに、平素の朗かさは全く隠れて、私にも言ふときにも、耳許で囁かれる始末なのでした。それでゐて、油断なく夫君の態度に注意し機を見ては茶を勧めたり、菓子や果物を供へたり、それはく俗にいふ痒いところへ手の届くやうな世話の仕ぶり、私などたゞもう感心するばかり、のみならず私が辭去する際は、玄關に送り出て靴までも直され、何時も定つて、『本當に御苦勞様でございます』と自分のことでもして貰つたやうに禮を言はれるので、此方が反つて痛み入つてしまふくらゐでした。

これは少々後の話でしたが、あるとき元帥が、

『種々の御修業の中で、機械體操と馬術のお稽古が實に心配ぢや。高い所へお昇りになつたり、御乗馬の際、もしお手がお脱れ遊ばしたら、御乗馬が膝でも折つたらと考へると、實に身が竦縮むやうぢや』

と沁々言はれたことがある。それを何かの機会に、つい浮かと夫人に話してしまひました。すると夫人は強く首肯かれて、

『それはもうその筈で、東郷は定めし壽命を縮めるほどでございます。併し、小笠原さん！ 宅ををりまして、あアあらうか、かうあらうかと、想ひやつてゐます私の心配も、あなたにはお察しがつきませう』

と、ホロリとせられたときには、私もたゞ同情せられるばかりで、頓には返事も出ませんでした。

前々より元帥に揮毫を依頼する者は非常に多かつたのですが、東宮御學問所總裁拜命後は、ますます殖える一

方でした。尤も大抵は謝絶られたが、已むを得ず承諾せられた分だけでも、いつも何十枚と滞つてゐるのですから、日曜日にはよく筆を執られた。さういふとき夫人は私と一緒に、その世話をせられました。これとてもよく行届いて、墨汁を更に磨る、紙を折る、字配りに注意するといった風に、元帥が筆を執り易いやうに仕向けるその取扱ひぶりは、まことに手に入つたもので、今世に遺つて世間から珍重せられてゐる、元帥の書に就いても人知れぬ夫人の苦心が籠められてゐるのであります。

話は凱旋當時に戻りますが、現在硬骨將軍として知られてゐるK中將が、まだ佐官であつて、一夜元帥を訪れて揮毫を依頼した。すると元帥は、快く承知して即座に筆を揮はれ、墨痕淋漓たる一幅が出来上つたはいゝが、どうした拍子か署名の上へ、K將軍のためにと書かれた。これを見たK氏、柄にもなくいさゝか間の悪さうな顔して頭を叩き、

『閣下！ 私はまだ中佐でございますから、將軍はちと閉口しますな。表装して他に見せるに何だか氣が差しますから、如何ですか書直してくだされませんか』

『そんなこと言うて二枚書かせる氣ぢやらう、さうはゆかんぞ。第一、君は豪傑の方では、將官以上ぢやないか、それで可え』

謹嚴な元帥にかう急所を突かれたのが、さすがのK氏も、闇夜に電信柱と衝突したくらゐに當惑し、眼をパチクリさせてゐましたが、

『二枚書かせるなど、そんな大それた料簡なんか毛頭ありません。これや弱つたな』
頻りに困却の體を示してゐますと、クス／＼笑ひながら夫人も仲裁に入り、

『Kさん！ あなたのやうな秀才は、程なく少將にお昇りになるのですから、構はんぢやアございませんか。主人もそれを見越して書いたのでせうから、縁起が良いぢやありませんか、前祝ひに何かお驕んなさいよ』
K氏ます／＼狼狽して、グウの音も出さず、今でも折に觸れては、その際のことを言ひ出し、あのときは参つたよと、述懐しつゝ、夫人のありし俤を偲ぶのであります。

元帥揮毫の際は、私も大抵出かけて往つて、夫人共々その世話をしたのですが、晝食なり夕食なりを御馳走になるのが常例で、それは夫人が心づくしの手料理なのでした。ところが、元帥の健啖に引替へて、私は至つて小食で、よく他人から御尋常なことですな、などゝ冷評されるほどでしたから、或るとき元帥は私と相對して食事、夫人に向はれ、小笠原さんは、何も食べずに生きてゐる人だよ、と冗談を言はれました。すると夫人は、アハ、と、例の男紛ひの笑聲を出されて、私を見返られ、

『その方が好うございますよ。此方(元帥を指す)などは老年のくせに、どうも多すぎてね。それに柿實が大好きで夜分になつてから五つも六つも食ふことがありますので胃を悪くはしないかと、心配してゐます。どうぞ小笠原さん、御意見なさつてください』

私の小食話を好い機會にして、それとはなしに夫君に意見するのでありました。これを聞いた元帥は、せうことなしに微笑して、一言もありませんでした。

柿と元帥とは、妙な因縁がありまして、元帥の死因であつた喉頭痛が、名醫達の盡力により、昨年三月非常に良くなつた際、元帥は氣持の快いまゝに庭に出て、得意の柿の接木をしました。それが障つて、忽ちぶりかへし遂に再び起たれなくなつたのであります。その接木は見事に生育して、現に東郷家にありますが、見たくもあり、見たくもなく、愛憎錯綜せる記念樹でございます。

四

正月が来る度に、東郷元帥及び夫人について思ひ出す話がある。それは大正五年のことでございます。

その前年の暮から、私は頸の後の方に腫物ができ、それが劇しく痛むので、到頭一月の三日に醫師の切開を受け、そのまゝ臥床してをりましたが、四五日経つと大分よくなつたので、東宮御學問所の件に關し打合せをするため、七日に總裁たる東郷元帥邸を訪れました。その際は頸より頭にかけて繃帯を施し、その兩端を頸の下で結んでゐたので、丁度頬被りをしたやうな、變な恰格をして玄關に立つたゆゑ、取次に出た識合の女中も私と氣づかず、疑ひの眼をもつて、暫時見つめてゐましたが、『小笠原です』と名乗をあげるのを聴くと、危く噴き出しさうになりながら内へ驅込み、今度は改めて出て来て、『どうぞこちらへ』と、奥の應接室へ案内してくれました。それほど可笑しな容子をしてゐたものですから、入つて來られた元帥も夫人も、いさゝか妙な表情をせられ、一應年賀の詞を取交すと直ぐに元帥が、

『電話で承つたが、腫物はどうですか、まだ痛むかな』

と、例の如く勞るやうに優しく問はれました。

『切開して貰ひましたお陰で、大變によくまりました。十日には沼津へお供ができます』
この沼津へお供するといふことについて、一應説明いたしませう。

大正三年東宮御學問所が御設置になつてより同十年三月一日御閉鎖に至るまでの七年間、毎年一月中旬より、三月中旬若しくは下旬までは、殿下におかせられては、沼津御用邸に成らせられたので、従つて御學問所も、同御用邸内にお移しになり、東郷總裁を初め御學問所職員一同も、そこへ伺候したわけなのである。されば大正五年のこの春も、一月十一日御用邸に於て、御始業式を御舉行あらせられることに決定したので、東郷元帥は、總裁の資格を以てそれに列し奉るべく、幹事たる私を伴うて十日に東京を出發する豫定であつたから、さてこそ

『十日には沼津へお供ができます』と答へたのであります。

すると、傍らにをられたテツ子夫人は、心配けに私の顔を眺めて、
『本當にお出發になつてもいいのですか。なんだかお顔が、少しむくんでおいでのやうに見えますよ。御奉公の前がお長いのですから、無理をなさらずにもう少しお休みになつた方がよろしいでせう』

と切に休養を勧められました。私は御學問所の奉仕が氣になるので、『もう大丈夫です』と答へ、夫人の勸告に應じませんでした。

すると夫人は、いつもの淡泊さに似けなく執拗に自説を主張され、私も負けずに争つてゐますと、最前より黙々としてこの論争を聞いてをられた元帥は、やがて私に向ひ、

『お醫者さんは、何と言はれたな』

と問はれましたので、

『大概よからうと申しました』

と答へると、

『お醫者さんが許したのなら、構はんでせう。殊にあなたは自分の氣持で、弱くも丈夫にもなる性質なのぢやから、東京にゐて苛々するよりも、沼津に伺候した方が、身體にもえゝかも知れん、一緒に參上しませう』
それを聞いた夫人は、なほも止めようとするのを、

『心配せんでもよか』

と言ひ切られたので、夫人も到頭納得し、同月十日、元帥に隨うて沼津に赴くことになつたのであります。

ところが、その途中の汽車の中で、切開した痕が疼きだし、腰かけてゐるのが、つらくてたまらなくなりました。すると、その容子を見てをられた元帥は、

『痛むかな？ 他に乗合もをらんのぢやから、遠慮せず、ベンチに臥ておいでなさい』

と、頻りに勧められるので、遂にその意に従ひ腰掛の上に横になつたが、やがてうつら／＼と半醒半眠の状態に陥つてをりました。

折しも半開になつてゐた車窓より風が吹き込み、枕許においた數種の新聞紙を吹散らかすのを、夢心地に感知はしても、起きるのが面倒なので、そのままにして抛つておくうち、何時しかまどろんでしまひましたが、ふと

何か身體に觸つたのを覺えたので、思はず眼を開けて見ると、向ひ側に腰かけてゐる筈の元帥は、そつと私の傍に忍びよつて、持參せられた膝掛を、私の身體にかけてをられるところでありました。そのみか、車窓は鎖され、新聞紙も丁寧に疊まれてあるではありませんか。それと見た私は、遂に、熱い或るものが咽喉へ突上げてまゐり、眼尻からは涙が容赦なく流れ落ちました。それを拂ひもあへず起上らうといたしますと、元帥は、強ひて押し止め、

『氣分は、どうです。少しはよくなつたかな。これをおやつて御覺なさい』

と、夫人が心盡しの持たらせか、小包の中より支那蜜柑を取出し、皮を剥ぎ織までも取去つてくれました。その味！厚情が迸つて、甘露も醍醐味もあつたものではありません。さうしてその半分は、夫人の心盡しによるものと思ふと、今この記事を書きつゝも、幾度か、眼を拭はずにはゐられませんでした。

元帥が、高輪の東宮御學問所に伺候される朝の時間は、夏季に於ては午前七時前後でありましたから、自邸を出られるのは遅くも六時半頃で、従つて夫人の起床は四時見當でありましたらう。さうして夫君の出勤前の世話を一切女中等の手を藉らずに自分一人でせられ、夫君を送りてよりは、書齋の片附、書類の整頓等は勿論、その雨戸の開閉より掃き掃除まで擔當せられ、夫君の穿かれる下駄まで、自身で洗はれたと申すことでもあります。大勲位はしばらくおくとして、勅任官以上の夫人で、こんな健氣な行状をせられた婦人が他にありませうか。實以て、頭が低らざるを得ないのであります。

東宮御學問所は、大正十年三月一日を以て御閉鎖となり、總裁以下の職員職制を廢せられました。私は御沙汰により午後一時宮内省に出頭致しましたところ、元の御學問所職員一同へ、それ／＼の賜物がありまして、總裁たりし東郷元帥には、特に梨地蒔繪菊桐御紋散糸卷太刀を賜はりました。

その刃の長さは二尺二寸一分半、丁子亂の刃文靈光を放つてその美しさは、鏡上に白梅花を押したる如く、春の霞と見紛ふ句は、地鐵にかけて風韻渺茫、一見してその神品たることが稱せられ、さうしてその銘は漢文で、『三條布施藤原吉則越前に於て作る』と刻んであり、その裏面には、『他手に渡すべからず布施四郎左衛門尉源久慶重代』とあります。

因に、この御太刀について宮内省の某大官は、私にかう謹話したことがあります。この名刀を御紋散の太刀造にお仕立て遊ばされたるは、日露戦役當時、大元帥陛下の思召に出でたるもので、一部に傳へられるところによると、同戦役における第一の勲功者に賜はる聖慮であらせられたが、陸の大山元帥、海の東郷元帥、共に大勲功を建て、優劣あらざりしを以て、右の御太刀は、そのまゝ御手許に留めおかせられるに至つたのであるとの御事で、何にしても、御物中に於ても、稀代の名刀たるは疑ひないところでありました。

私は恩賜のこの太刀を捧持して直に東郷邸を訪問し、元帥に手渡ししようと思ひました。ところが折悪しく、元帥はまだ歸邸せられませんでした。これは後に判つたことではありますが、七年間の重任が滞りなく相濟んだお禮として、明治神宮に参拜せられてゐたのでした。そこで私はテツ子夫人に恩賜の次第を告げ、お受取を願ひましたところ、夫人は思ひも寄らぬといふ面差で、固く辭退し、

「平素、主人が刀劍の手入をいたしますときには、一切自分でいたしまして、私共には手も觸れさせませぬ。これは多分武士のたしなみとして、婦人などには、手を觸れさせぬといふ精神からだらうと存じまして、わざと手助けなんか差控へてをるほどでございますから、私がそんな尊い御刀をお受取いたすわけにまゐりませぬ。只今刀掛を持参しますから、小笠原さんどうぞ、あなたそれにお掛けくださいまし」と一揖して退かれたが、間もなく立派な刀掛を持参せられ、それを床の間に直して私に目禮せられました。私もその心掛に感服しましたので、強ひては争はず、同じく目にて承知の旨を示し、恭々しく恩賜の太刀を刀掛に安置しますと、夫人は一間ほど隔て、端坐し、兩手を疊に突いて平伏されました。その態度の餘りの崇重さに打たれた私は、我しらす同じやうに跪いてしまひました。恐らくこれが夫人の本領の全體を物語つてゐるものでありませう。

私は翌日禮装して改めて元帥を訪問し、七ヶ年の間不肖の身を以て東宮御學問所幹事の重任を辱うし、幸ひに大過なきを得たるは、一に總裁たりし元帥の高庇によるところたるの謝辭を述べた。すると紋服に著替へられた元帥も鄭重に禮を返され、言葉つきさへ改まつて、

「やア、大切な奉仕も滞りなく相濟んで、御同慶に堪へませぬ。東郷こそ、皆さんの一通りならぬ御援助を得たため、どうかかうか御奉公を仕り得たのであつて、殊にあなたには、何から何までお任せした次第、眞に御若勞でございました。厚くお禮を申します。それについてテツ子からも御挨拶いたしたいといひをりましたから、今こゝへ呼びませう」

女中にそれと傳へさせたので、程もなくテツ子夫人は同じく紋服に著替へ慎しやかな姿で立現れ、恭々しく一禮せられて、

「この度は本當にお目出たうございました。長い間東郷をお助けくださいました、こんなむづかしい御用の勤まりましたのも皆様方のお骨折のお陰で、別して小笠原さんとは、長いお馴染でございますので、さぞ我儘ばかり申上げたことでございます。いつも主人は、あなた様がおいでくださるから心丈夫だと申してをりました。まアこれから暫くはお休息遊ばして、お身體を御大切になさつてくださいませ。本當に私までも、何だか重荷を下したやうで、今晚から安心して寝ませう」

あまりに懇切な挨拶で、私は却つて痛入るばかりか、夫人の眼が潤んでゐるのを見ては、私までも何だか泣きたいやうな心持になつて返辭が胸に支へてしまつた。さうして、そつと元帥の方を見ると、さしもの元帥も感懐無量の面色で、眼をしばたゝいてのみをられた。

これを要するにテツ子夫人の性格は、貞烈の骨に明朗の肉を著け、更に平凡の皮を以て、それを被うたといつたやうなものでありまして、偉大なる東郷元帥の配偶として、唯一無二の適合者であられました。

昭和十六年十一月二十日印刷
昭和十六年十二月一日發行

【定價壹圓八拾錢】

【本讀將聖】
版及普傳全鄉東將聖

編著者 小笠原長生

發行者 市川銑造

印刷者 兩友堂
森島金治郎

東京市麻布區宮村町七八番地

東京市小石川表町十八番地

發行所

南方出版社

電話小石川七九〇番
振替東京一六八五三六番

配給元 日本出版配給株式會社

東京市神田區淡路町二丁目九番地

海軍中將 子爵 小笠原長生 編著

聖將東郷全傳

總頁二千四百四十二頁
上製箱入・寫真多數挿入
定價 拾九圓五拾錢

送料 五拾錢

全完 三卷成

聖將東郷元帥薨じて爰に七年。元帥の全傳を刊行す。惟ふにこれ此の聖將の盡忠至誠を改めて江湖に紹介し、以て益々複雑を極むる世相に對し、皇國民として向ふ所を確認せしめんが爲めなるなからんや。

第一卷 本傳 第二卷 外傳 第三卷 言行錄

元帥伊東祐亨

海軍中將子爵 小笠原長生 編

定價 參圓五拾錢
送料 拾四錢

元帥海軍大將正二位大勳位功一級伯爵伊東祐亨の事蹟を録す。

正傳 奧村五百子

海軍中將子爵 小笠原長生 著

定價 貳圓
送料 拾錢

至誠身を忘れ國を愛ひて六十三年、國家的活動を以て一貫したる我國女性の先覺者、愛國婦人會の生の親奧村刀自の正傳。

南方出版社發行

922
E
98

終

南方出版社刊